

# 長野県埋蔵文化財センター年報32

2015

一般財団法人長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター





佐久市 尾垂遺跡古墳全景



長野市 塩崎遺跡群遠景





長野市 塩崎遺跡群出土土器



栄村 ひんご遺跡竪穴住居跡





長野市 浅川扇状地遺跡群三輪地区遠景



長野市 浅川扇状地遺跡群桐原地区出土土器





飯田市 龍源寺跡遠景



飯田市 鬼釜遺跡出土馬具（上：雲珠 中下：鞍金具 6cm）

# 目 次

## 口絵写真

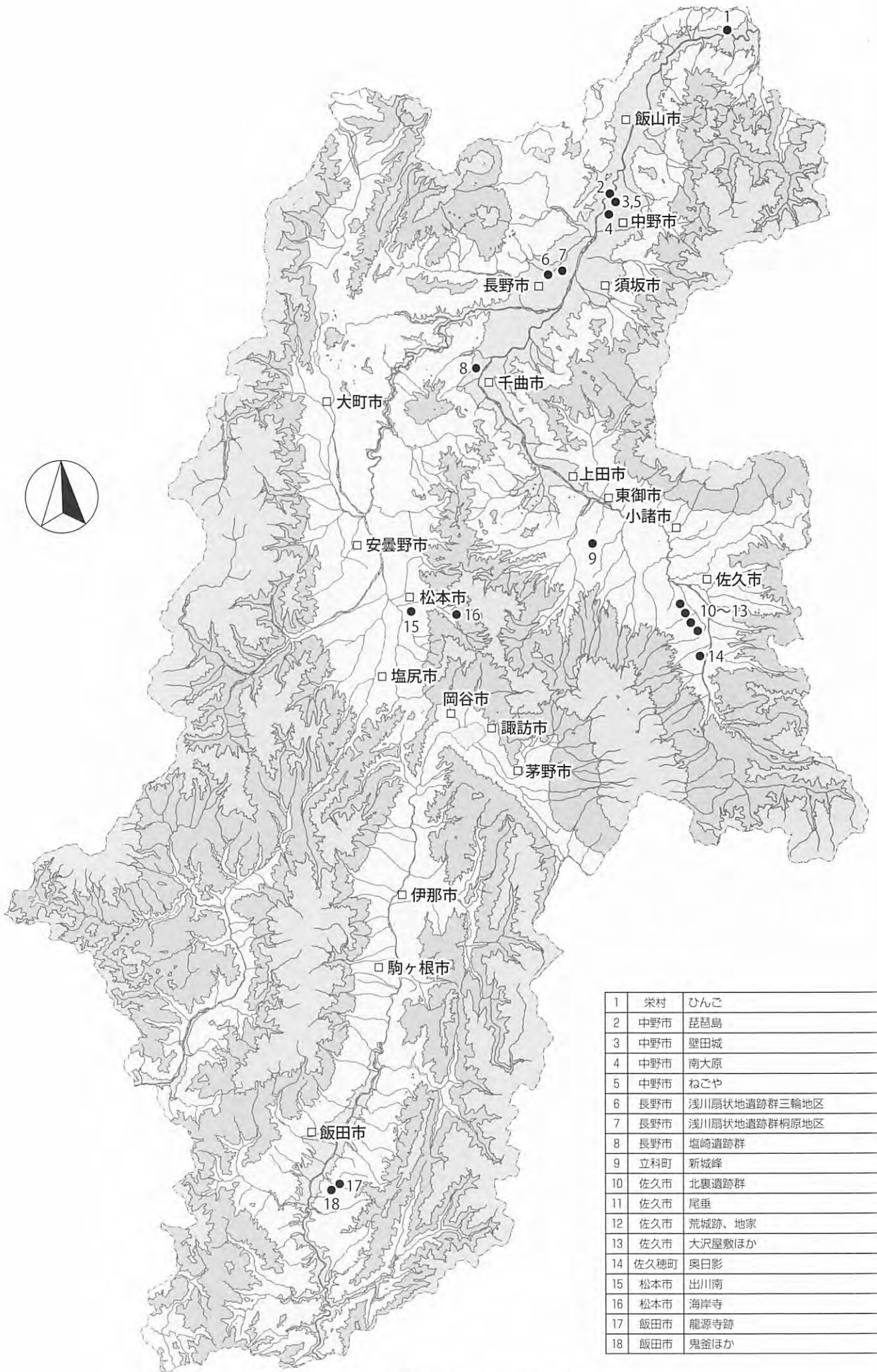
- ・ 佐久市 尾垂遺跡古墳全景
- ・ 長野市 塩崎遺跡群遠景
- ・ 長野市 塩崎遺跡群出土土器
- ・ 栄 村 ひんご遺跡竪穴住居跡
- ・ 長野市 浅川扇状地遺跡群三輪地区遠景
- ・ 長野市 浅川扇状地遺跡群桐原地区出土土器
- ・ 飯田市 龍源寺跡遠景
- ・ 飯田市 鬼釜遺跡出土馬具

## 目 次

I	2015年度の事業概要	1	V	研修等の概要	37
			(1)	講師招聘などによる指導	37
II	発掘作業の概要	2	(2)	全埋協等への参加	37
(1)	尾垂遺跡	3	(3)	研修および資料調査	37
(2)	塩崎遺跡群	6	(4)	学会・研修会などでの発表	38
(3)	ひんご遺跡	10	(5)	市町村・関係機関などへの協力	38
(4)	ねごや遺跡	13	(6)	学校関係への協力・指導	39
(5)	浅川扇状地遺跡群三輪地区	14	(7)	資料の貸し出し	39
(6)	浅川扇状地遺跡群桐原地区	17	VI	組織・事業の概要	40
(7)	出川南遺跡	20	(1)	組 織	
(8)	龍源寺跡	21	(2)	職 員	
III	整理等作業の概要	23	(3)	事 業	
(1)	地家遺跡ほか	24			
(2)	浅川扇状地遺跡群桐原地区	25			
IV	普及公開活動の概要	26			
(1)	国庫補助事業の概要	26			
(2)	現地説明会	28			
(3)	講演会	29			

奥付





1	栄村	ひんご
2	中野市	琵琶島
3	中野市	壁田城
4	中野市	南大原
5	中野市	ねこや
6	長野市	浅川扇状地遺跡群三輪地区
7	長野市	浅川扇状地遺跡群桐原地区
8	長野市	塩崎遺跡群
9	立科町	新城峰
10	佐久市	北裏遺跡群
11	佐久市	尾垂
12	佐久市	荒城跡、地家
13	佐久市	大沢屋敷ほか
14	佐久穂町	奥日影
15	松本市	出川南
16	松本市	海岸寺
17	飯田市	龍源寺跡
18	飯田市	鬼釜ほか

図1 平成27年度調査・整理対象遺跡

## I 2015年度の事業概要

本年度は、国または県の公共開発事業にかかる発掘調査事業12件および研修等事業1件を受託し、自主事業として6遺跡で計12回の遺跡現地説明会を実施した。

以下、受託事業を中心に概要を報告する。

### 1 発掘調査事業

国土交通省から4億1,667万円、県から3億544万円、計7億2,211万円余りの受託費により、10遺跡の発掘作業と41遺跡の整理作業を実施した。

#### (1) 発掘作業

栄村ひんご遺跡（県道建設事業）では、千曲川に南面する縄文中・後期集落の縁辺を調査した。柄鏡形（敷石）住居跡や礫で根固めをした複数の柱穴、粘土採掘土坑など注目すべき遺構がみつかった。

3年目となる長野市塩崎遺跡群（国道改築事業）では、弥生中期の木棺墓計56基を発見したが、これに伴う竪穴住居跡は1軒もない。墓群と住居群の占地は異なるようだ。また、千曲川西岸の自然堤防上は縄文晩期以降中世まで、断続的ながら長期に亘って営まれた集落であることは明らかだが、西側の後背湿地に面して、井戸を除き、各時代の遺構が希薄になっていることが判明した。次年度は後背湿地（石川条里遺跡）の調査を予定している。

長野市浅川扇状地遺跡群三輪地区（学校建設事業）では、弥生後期吉田式土器を伴う竪穴住居跡7軒と掘立柱建物跡1棟を調査した。これまで吉田式土器を伴う単一集落は長野吉田高校グランド遺跡以外にないため、北信地区の弥生中期から後期への変遷を辿るにあたり、不可欠な資料群となる。

5年目を迎えた浅川扇状地遺跡群桐原地区（街路整備事業）では、25年度にみつかった周溝墓に後続する時期のそれが、南北に4基並んで構築されていたことがわかった。それぞれの全体形や構築順は不明ながら、うち1基の周溝から出土した土器は東海地方の影響を受けたものが含まれる。これらを弥生の墓制から連続すると単純に捉えるか、弘法山古墳のような前方後方墳の信州への進出との関係で読み解くべきか、課題は大きい。

佐久市尾垂遺跡（中部横断道建設事業）では、未周知の古墳終末期の円墳を、また飯田市龍源寺跡（県道建設事業）では室町時代の礎石建物跡を発見した。いずれも整理作業の中で遺構と遺物を精査した上で、周辺の同時期の遺跡との比較検討をおこない、地域史に位置づける作業が必要になる。  
(2) 整理等作業

中野市南大原・琵琶島・ねごや遺跡、壁田城跡（県道建設事業）、飯田市鬼釜・風張遺跡、神之峯城跡（飯喬道路建設事業）、立科町新城峰遺跡（国道建設事業）および松本市海岸寺遺跡（堰堤建設事業）では、発掘調査報告書を作成し刊行した。

琵琶島・南大原遺跡の炭化物から導いた栗林期の実年代、竜東地区初見の鬼釜古墳殉葬馬墓の位置づけ、神之峯中腹に点在する礎石建物跡や掘立柱建物跡と城跡との関係、尾根上に立地する中世新城峰の小集落の意義、松本市域の古代寺院址と海岸寺遺跡の比較検討など、一定の成果とともに地域史解明に向けた課題のいくつかを提示した。

なお、中部横断道佐久南ICから（仮称）八千穂IC間の31遺跡や、長野市浅川扇状地遺跡群桐原地区は、長年継続してきた発掘作業の成果を系統立てて分類整理する作業を中心に実施した。

### 2 研修、普及公開事業

県教育委員会から76.9万円を受託し、研修および普及公開事業を実施した。

研修事業は、奈良文化財研究所の専門研修「文化財写真課程」、「応急処理課程」を受講した。

普及公開事業は、文化庁の文化財補助金（「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」）を活用して、体験学習会（夏休み考古学チャレンジ教室、発掘体験）、講演会、遺跡報告会、広報資料（「信州の遺跡」「ジュニア考古学」など）の作成、遺跡解説板の設置などを実施した。今回は、中部横断道佐久南ICまでの発掘調査事業完了を記念し、佐久平交流センターで初めて講演会、遺跡報告会をおこなった。また、遺跡解説板は東信地区の陣馬塚古墳（上田市玄蕃山公園）に設置した。〔平林 彰〕



## II 発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代と主な構造	主な遺物
きたうらいせきぐん 北裏遺跡群	佐久市	中部横断自動車道	35	6月29日～ 7月22日	時期不明：溝跡、土坑	弥生土器ほか
あらしうせき 荒城跡			1,270	12月4日～ 12月8日	なし	なし
おだれいせき 尾垂遺跡			5,000	4月6日～ 12月16日	古墳：円墳。古代：竪穴住居跡、土坑。中世：礎石建物跡	縄文：土器、石鏃。古墳～中世：土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、青白磁、石鏃、羽口、瓦塔、直刀、紡錘車、鎌
おくひかげいせき 奥日影遺跡	佐久穂町		260	4月10日～ 5月25日	なし	なし
しおざきいせきぐん 塩崎遺跡群	長野市	坂城更埴バイパス	6,000	4月10日～ 12月24日	弥生～古代：竪穴住居跡、溝跡、墓跡。弥生～中世：土坑、井戸跡	縄文～中世：土器・陶磁器・土製品（土偶、土鍾、紡錘車、ミニチュア土器、土玉、勾玉、円面硯）。弥生：石器・石製品（打製・磨製石鏃、打製・磨製石斧、石包丁、石鎌、石錐、勾玉、管玉）、古墳（白玉）、古代（砥石）。弥生：金属製品（銅釧、鉄鏃、鉄製釣針）、古代（鉄製刀子、鉄鏃、鉄製紡錘車）。弥生～古墳：その他（ガラス小玉、ヒスイ・緑色凝灰岩剥片、骨ほか）
ひんご遺跡	栄村	県道箕作飯山線	1,300	7月1日～ 11月13日	縄文：敷石住居跡、竪穴住居跡、粘土採掘坑、土坑、溝跡、配石遺構、土器集中、焼土跡	縄文：早～後期土器（浅鉢、深鉢、注口土器、ミニチュア土器）、石器（石鏃、石槍、打製・磨製石斧、石棒、石皿、磨石、凹石、剥片）、骨、焼粘土塊
ねごや遺跡	中野市	県道豊田中野線	2,568	9月1日～ 10月30日	弥生：溝跡。古代：土坑、遺物集中	縄文・弥生・古代・中世：土器（楕円押型文、須恵器、土師器、内耳土器）
あさかわせんじょうち 浅川扇状地 遺跡群 みわちく 三輪地区	長野市	県立大学	6,000	4月7日～ 11月30日	弥生・古代：竪穴住居跡。弥生：掘立柱建物跡、墓跡。古墳・古代：溝跡。縄文～古代：土坑。縄文・弥生：遺物集中	縄文～中世：土器（縄文晩期、弥生後期、古墳中期、平安、中世陶磁器）。弥生：凹石、剥片。古代：刀子。古代：獣骨、木製品
あさかわせんじょうち 浅川扇状地 遺跡群 とりはらちく 桐原地区	長野市	県道高田若槻線	2,606	4月7日～ 11月30日	弥生～古代：竪穴住居跡。弥生～中・近世：溝跡。弥生～中世：土坑。古墳：墓	弥生～中・近世：土器、須恵器、土師器、陶磁器。弥生～中・近世：石製模造品。中・近世：銭貨ほか。古墳以降：獣骨
いでがわなんいせき 出川南遺跡	松本市	(都) 出川双葉線	165	4月15日～ 5月29日	古墳・中世：竪穴状遺構。中世：掘立柱建物跡、土坑、ピット、溝跡、畝跡	弥生・古墳：土師器、須恵器。石器：黒曜石剥片
りゅうげんじいせき 龍源寺遺跡	飯田市	国道256号改修	1,750	4月9日～ 8月11日	中世：礎石建物跡、井戸跡、土坑、焼土跡。近世：石積み、竪穴状遺構	中世：古瀬戸碗・皿・鉢皿、内耳土器。縄文：打製石斧。中世：銭貨。中・近世：刀子、釘。その他：鉄滓、黒曜石片、瓦



# おだれいせき (1) 尾垂遺跡

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久市前山字尾垂

国道141号線洞源湖入口交差点から南西約1.7km。

遺跡の立地環境：千曲川左岸、八ヶ岳北麓から北

東に延びる丘陵裾部の南側平坦地に立地。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
4.6～12.16	5,000㎡	藤原直人 上田真 寺内貴美子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
古墳	1	古墳
竪穴住居跡	18	平安
礎石建物跡	1	中世
土坑	153	平安
溝跡	3	平安以降

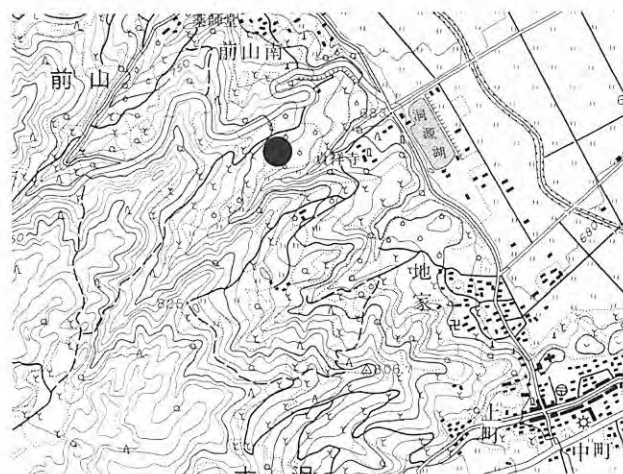


図2 尾垂遺跡の位置 (1:50,000 小諸)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文(土器) 古墳(須恵器) 平安(土師器、須恵器、灰釉陶器) 中世(青磁)
石器	縄文(石鏃)
土製品	平安(鞆の羽口、瓦塔)
金属製品	古墳(直刀・鉄鏃)、平安(鎌・紡錘車)
その他	鉄滓



図3 石室



遺跡は地形的に丘陵頂部付近の傾斜地と、その南側下方の段丘上の平坦地とに大きく分かれ、その間が急崖となる。今年度は昨年確認調査を実施した南側下方平坦地の本調査を行った。その結果、古墳1基、平安時代の竪穴住居跡18軒、土坑153基、溝跡3条、中世の礎石建物跡1棟を検出した。

### 未周知の古墳の発見

調査区北部の傾斜地で未周知の古墳が発見された。後世の造成で破壊されているが、墳丘裾にめぐらされた石の列（列石）と周溝の一部が残存する直径約11mの円墳である。墳丘の北側は斜面を掘り込み、東側と西側は盛土をして構築している。墳丘北側には、最大幅約2.5mの周溝をもつ。主体部は南に開口する横穴式石室で、南側が破壊されて失われているが、玄室は残存長約4.3m、奥壁部分の幅で約1.6mを測る。東側壁の一部は倒れた状態であった。墳丘上部は削平され天井石は失われていた。石室の周囲には、多量の川原石が裏込めに使用されている。床面にも川原石を敷き詰めている。石室の構造や規模から、7世紀後半～8世紀ごろに築かれたと考えられる。

玄室内からは、人骨が奥壁近くの東側に集めた状態でみつかった。残存状況はあまりよくないが、1人以上の骨がある。時期ははっきりしないが追葬が行われていたと思われる。

玄室中央部の西側床面からは、全長約56cmの直刀が出土している。刃部の長さは約46cm、幅は最大で2.5cmとなる。直刀よりさらに奥の側壁寄りの床面からは長さ約13～14cmの鉄鏃がまわって出土した。錆びで礫に付着したものもあり、現在確認できるのは19本である。他に、玄室内埋土中層より平安時代の須恵器甕の破片等が出土している。

佐久市内では、千曲川右岸山裾に多くの後期古墳が確認されているが、左岸では少ない。今回の調査は、千曲川左岸での貴重な成果となろう。



図4 直刀



図5 鉄鏃



図6 人骨の出土状況

### 礎石建物跡と寺院伝承

礎石建物跡が1棟、古墳の南側平坦地で確認された。後世の耕作等の影響を受けているが、礎石の多くは黒褐色土を掘り込んで据えられていた。礎石が抜けた痕跡と考えられる落ち込みも数基礎



認でき、2間×3間程度の建物があったことが推察される。

この地には「龍覚寺」という寺院が焼失し、現在の前山寺付近に移転したという伝承がある。今回見つかった礎石建物跡がそれと関係するのか、今後の課題である。

#### 平安時代の集落跡

平安時代後半の遺構は、平坦地でみつかった。竪穴住居跡は、古墳や礎石建物跡より一段上の小高い平坦地を中心に分布している。それ以外の遺構は、竪穴住居跡周辺やその下段の平坦地で検出した。土器・石器以外に鞆の羽口や鉄滓が溝跡等から出土しているが、製鉄を行っていたことを示す遺構はなかった。

来年度調査予定である用地南東部の確認調査も

あわせて行ったが、遺構・遺物はなかった。このため、中部横断自動車道佐久南I.C. - 八千穂I.C.間の発掘作業は今年度で終了となった。今後は、報告書作成に向けて本格整理作業を進めていく。

〔寺内貴美子〕



図7 礎石建物跡 (ST01)



図8 遺跡遠景 (南側上空より)

## (2) 塩崎遺跡群

(一般国道 18 号坂城更埴バイパス関連)

所在地及び交通案内：長野市篠ノ井塩崎 2568 ほか

JR 篠ノ井線稲荷山駅から南東約 1km

遺跡の立地環境：千曲川左岸の自然堤防（標高 358 m 付近）にかけて立地し、調査区は自然堤防を横断するように位置する。

### 発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
4.10～12.24	6,000㎡ (H27新規分)	市川隆之 近藤尚義 柳澤 亮 廣瀬昭弘 飯島公子 高山いず美 大久保邦彦 風間真起子 綿田弘実 鶴田典昭 谷 和隆 小林伸子 片山祐介 腰地孝大 太田光春

### 検出遺構

遺構の種類	数(総数)	時期
竪穴住居跡	255 (462)	弥生中期～平安
溝 跡	56 ( 87)	弥生～奈良
墓 跡	33 ( 88)	弥生前期末～平安
土 坑	1,410 (2,212)	弥生前期末～中世
井 戸 跡	63 ( 68)	弥生中期～中世

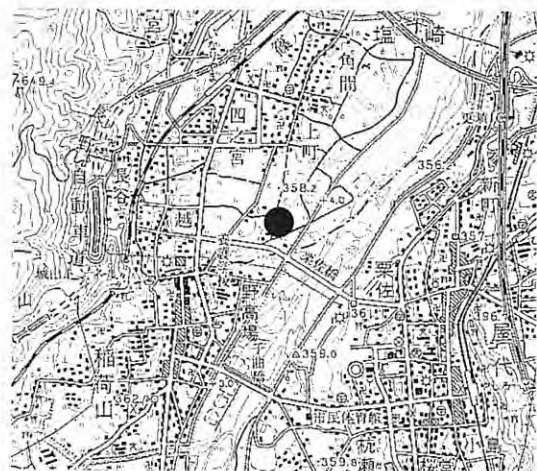


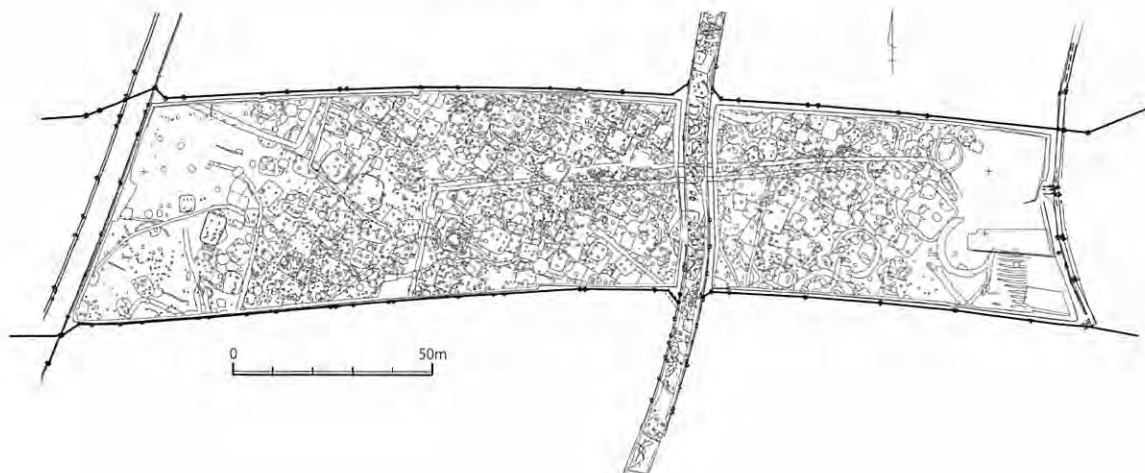
図 9 塩崎遺跡群の位置 (1:50,000 長野)

### 出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器・土製品	縄文～中世（土器、土偶、紡錘車、土錘、ミニチュア土器、土玉、勾玉、円面硯）
石器・石製品	弥生（打製・磨製石鏃、打製・磨製石斧、環状石斧、石包丁、石鎌、石錐、勾玉、管玉） 古墳（白玉） 奈良・平安（砥石）
金属製品	弥生（銅釧、鉄鏃、鉄製釣針） 奈良・平安（鉄製刀子、鉄鏃、鉄製紡錘車）
その他	弥生～古墳（ガラス小玉、ヒスイ・緑色凝灰岩剥片、骨）



図 10 遺構全体図と調査地





### 3年目の発掘調査

一般国道18号坂城更埴バイパス改築事業に伴い平成25年度から始まった調査は3年目に入り、本年は南北に走る市道を挟んで東側1-2・3区から西側2-1～4区の調査を実施した(図10)。

また、来年度以降の調査予定地となる本遺跡群西側の石川条里遺跡の確認調査も実施した。

塩崎遺跡群はこれまでの調査で弥生時代中期から平安時代にかけての住居跡や、土器棺再葬墓、木棺墓、方形周溝墓、古墳などの墓が混在する大規模な集落遺跡として知られている。

#### 弥生時代はじめの貯蔵穴と土器棺再葬墓

弥生時代前期末～中期前葉の貯蔵穴が2-2区でみつかった(図11)。平面は円形で断面がフラスコ形を呈し、小型の鉢や環状石斧、石鎌などが出土した。石鎌は、穂積具として使われたものであろう(図12)。

1-2区西側の地点で弥生時代前期末～中期初頭の土器棺再葬墓が隣接して7基みつかった(図13)。土器棺再葬墓に使われた土器は、遠賀川系土器と全面に条痕文が施された水神平系の2者がある。とくに後者の土器からは焼骨が出土している(図14)。

#### 弥生時代中期中葉の木棺墓群

1-2、2-2区で弥生時代中期中葉と思われる木棺墓群がみつかった。センターの調査では延べ56基(うち木棺墓45基、礫床木棺墓11基)が確認されている。木棺墓からは勾玉や管玉といっ



図11 貯蔵穴 (SK2621)



図12 貯蔵穴 (SK2621) 出土石鎌

た装身具(図15)、磨製石斧や石鎌などといった利器(図16)、小型壺が出土している。木棺墓の中には小礫を棺床のみ敷き詰めたタイプ(図17)や、拳大の礫を棺の外側に充填したタイプ(図18)がある。人骨の遺存状態はよくないが、赤色顔料の伴う例や、複数埋葬と考えられる例がある。



図13 1-2区西側木棺墓群



図14 土器棺再葬墓 (SK1502)



図15 木棺墓 (SM1040) 出土玉類



図 16 木棺墓 (SM2012) 出土石器類

木棺墓のタイプ間に、副葬品の種類や量などの差は今のところみられない。

#### いくつかの小群にわかれる墓域

16 基前後が隣接する木棺墓の小群を 2-2 区の調査で捉えた。こうした小群が一定範囲に複数集まって墓域を構成していると思われる。

墓域は 1 区西側から 2 区東側の範囲に広がっている。墓と同時期の住居跡はこれまでの調査では確認できず、墓を造った人たちの居住域は、調査区外にあったことになる。

#### 弥生時代後期の巨大な住居跡と集落

弥生時代中期後半の集落が一旦途絶えた後、後期前半頃から再び住居跡が認められる。弥生時代後期の住居跡数は最も多く、広範囲に分布している。この時期の竪穴住居跡は、床を貼り替えたり、少しずつ造り替えたりしながら住み続けている。この地が生活環境に適していたことを示し、大集落が形成されていったとみられる。

そうした弥生時代後期の住居跡の中で、11m × 7.5m の規模を測る大型の竪穴住居跡が 2-4 区南東隅で見つかった (図 19)。平面は長方形を呈し、周囲の住居跡よりも一際目を引く大きさである。そのほか、弥生時代後期の竪穴住居跡から銅釧、鉄鎌、鉄製釣針などが、土坑 SK3570 から鉄剣の可能性のある棒状鉄製品が出土している。

弥生時代後期末～古墳時代前期の住居跡は、自然堤防西側に偏在し、東端に分布する同時期の方



図 17 棺床に礫を敷いた礫床木棺墓 (SK2566)



図 18 棺の外に礫を充填した木棺墓 (SM2022)



図 19 大型竪穴住居跡 (SB2157)

形周溝墓と占地を異にしている。

しかし、弥生時代後期に繁栄してきた大集落は、古墳時代前期までで途絶える。

#### 古墳時代の様相

平成 25 年度 1-1 区で周溝の一部が検出された古墳時代中期の古墳 (SM1009) の続きが、今年



度1-3区でも確認でき、直径12～13m規模の円墳であることがわかった。墳丘部分や周溝北東部は削平され、主体部などは残存しない。周溝は北東方向を欠いているものの全体の7割ほど確認できた。出土遺物はわずかであるが、ウマの上顎歯が周溝の底に近いところからみつき、平成25年度に発見されたウマの下顎歯と同一個体である可能性がある。当地でのウマの飼育がこの時期に遡ることを示唆する貴重な資料になるであろう。

古墳時代中期のカマドを持つ竪穴住居跡が、古墳から100m西側で1軒みつかった。住居の床面からは、白玉31点や須恵器の甗などが出土している。本遺跡では、今までの調査で当該期の住居跡はみつかっていなかったため、築造された古墳と同時期の住居が唯一共存しており興味深い。

#### 奈良時代の区画溝

古墳時代後期の住居跡はみつからないが、古墳時代末頃～奈良時代のものは数多くみつき、1区東部から2-3、2-4区東側まで分布する。住居跡の分布が希薄になる西側で平面L字状の溝跡が検出された。溝の両端は調査区外まで続き、全容は捉えられない。奈良時代の須恵器杯蓋や杯身が出土し、集落内を区画するような溝と考えられる。

#### 集落内に点在する井戸跡

今年度の調査では自然堤防の後背低地側で弥生時代から中世の井戸跡が63基検出された。弥生時代から古墳時代前期の井戸で、上層で土器片が幾重にも重なり一度にまとめて捨てられたような例があった(図20)。また、井戸の底からは、完形の壺や甕が数個体出土した例が多く認められた(図21)。弥生時代後期には井戸が生活環境を潤す身近な存在となり、廃絶時に土器を廃棄したり埋納が行われていたと考えられる。

#### まとめ

塩崎遺跡群の調査は、遺跡群全体を40～50m幅で横断する形になり、自然堤防上東端に古墳や



図20 井戸(SK3168)上層土器出土状況



図21 井戸(SK2909)底土器出土状況

墓域、西へ広がる後背低地に向かって住居跡や井戸跡が密集する大集落であることがわかってきた。後背低地に近づく2区西側では遺構は少なく、居住域の西端であると思われる。さらに西側の後背低地の土地利用や性格については、来年度以降の調査が待たれる。  
〔飯島公子〕

# (3) ひんご遺跡 いせき

(県道箕作飯山線関連)

所在地及び交通案内：下水内郡栄村豊栄 2153  
JR 平滝駅より国道 117 号線を西へ約 300m 先  
左折。フランセーズ悠さかえ前。

遺跡の立地環境：千曲川左岸低段丘南端の標高約  
285m に位置する。

## 発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
7.1 ~ 11.13	1,300㎡	谷 和隆 太田光春 綿田弘実 鈴木時夫

## 検出遺構

遺構の種類	数	時期
敷石住居跡	3	縄文後期
竪穴住居跡	17	縄文中～後期
粘土採掘坑	1	縄文中期
土 坑	169	縄文中～後期
溝 跡	1	縄文
配石遺構	5	縄文後期
土器集中	11	縄文中～後期
焼土跡	5	縄文中～後期



図 22 遺跡遠景 (南東より)

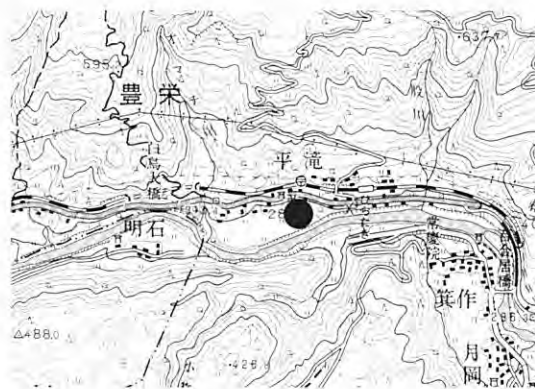


図 23 ひんご遺跡の位置 (1 : 50,000 苗場山)

## 出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品	縄文早～後期 (浅鉢、深鉢、注口土器、ミニチュア土器、土偶)
石器・石製品	縄文 (石鏃、石槍、打製石斧、磨製石斧、石棒、石皿、磨石、凹石、剥片ほか)
その他	縄文 (骨、焼粘土塊)

## 遺跡の概要

栄村遺跡台帳には、縄文時代中期の遺跡として登録される。県道箕作飯山線の建設にあたり、平成 26 年に栄村教育委員会が試掘調査を行い、縄文時代の遺物包含層が確認された。本年度は当センターで発掘調査を行った。

調査の結果、敷石住居跡 3 軒を始めとし、数多くの遺構や遺物を発見した。住居跡の存在から集落跡を想定できるが、主な時期は縄文時代中期(桁倉式期)と後期(堀之内式期)である。後述するように後期の集落に中心時期がある。

土層は上から耕作土、砂層、粘土層、砂礫層、腐植土層、砂層の順番に堆積し、上から I～VI 層と符号した。III 層は黄灰色シルト質粘土 (厚さ約 20cm) と灰白色粘土 (厚さ約 20cm) からなる。粘土質層最下面には鉄分の集積が認められ、覆水等、千曲川に関わる何らかの影響があったと考えられる。V 層黒褐色腐植土層は大量の土器を含み、厚さは約 30～50cm ほどある。この腐植土層面で遺構を検出した。



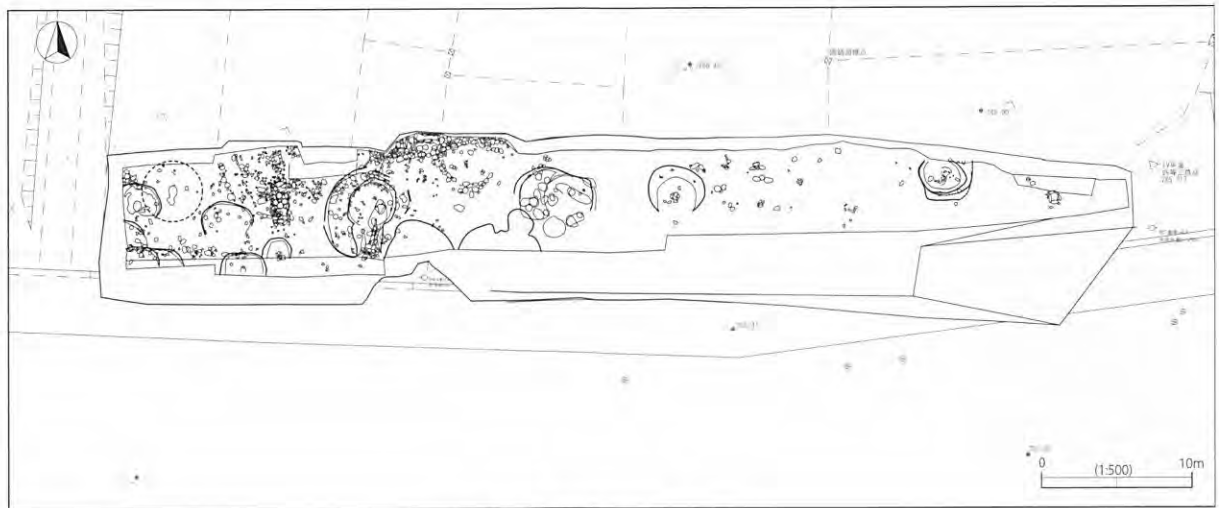


図 24 遺跡全体図 (1:500)

### 縄文時代中期から後期にかけての遺構

竪穴建物跡は 17 軒検出された。円形で直径 4m 前後を測るものも多く、一番深いものでは 1m 以上の掘り込みがある。時期の詳細は不明な部分が多いが、中期中葉（栃倉式期）から後期前葉（堀之内 2 式期）に属すると考えられる。

土坑は、粘土採掘坑を含め 170 基が検出されている。直径約 40cm、深さ 40～60cm 程の規模を測るものが比較的多いが、その性格については判明している土坑は少ない。

粘土採掘坑は、採掘の状況が明瞭で、調査区の最も深い所に堆積した粘土層を抉るように掘り込まれている。中期中葉（栃倉式期）の土器が出土し、この時期に採掘されたと考えられる。本遺跡の遺構の中では最も古く位置づけられる。

石組みを伴う土坑 6 基を検出した。柱を支えるための裏込め石と考えられるが、縄文時代の遺構としては類例を聞かない。柄鏡形敷石住居跡の下層で検出したが、それとの関係性については不明である。今後、類例を追及し、性格を明らかにしていくことが課題である。

### 発見された縄文時代後期の敷石住居跡

本年度の調査によって、縄文時代後期の集落の存在が確認できた。遺構は、主に V 層の上面と下面で検出されており、遺構の密度は非常に高い。

以下に敷石住居跡についての概要を記す。

敷石住居跡は 3 軒検出された。そのうち 2 軒は

入口部が張り出す柄鏡形の敷石住居跡である。関東を中心に多くの事例が報告されており、日本海側では発見例が少なく、県内では稲荷境遺跡（木島平村・縄文時代後期）や八幡添遺跡（高山村・縄文時代中期末葉）などに事例はあるが、今回の発見は県内最北となる。敷石に用いられた石は千曲川から運ばれてきたと思われる偏平円礫で、長さ 40cm 前後が多く、それら円礫の間には長さ



図 25 粘土採掘坑 (SK156)



図 26 石組みを伴う土坑 (SK81)



図 27 柄鏡形敷石住居跡 完掘状況



図 28 出土土偶（縄文時代中期）

約 10cm の小さい石が詰められている。

#### 縄文時代早期から後期にかけての遺物

遺跡から出土した土器は縄文時代早期（絡条体圧痕文、押型文）、中期ではいわゆる火焰土器、後期では新潟県域の土器として知られる三十稲場式・南三十稲場式、さらには加曽利 B 式の土器片が出土した。それらが伴う遺構は確認できず、その時期に集落が存在していたかについては不明である。

#### 特徴ある土偶の顔

今回の調査では土偶が、顔 2 点、腕 2 点、胴 1 点、脚 3 点が出土した。腕は同一個体と思われるが、それ以外については別個体と思われる。鼻の下を長く伸ばしている特徴的な表情の顔で、同じ千曲川（信濃川）下流域、中津川沿いの新潟県津南町道尻手遺跡にも似た土偶が出土している。

[太田光春]



図 29 調査区全景（西より）



## (4) ねごや<sup>いせき</sup>遺跡

(一般県道豊田中野線関連)

所在地及び交通案内：中野市壁田 1412 -イ他  
 国道 292 号線 壁田交差点から西へ約 600 m  
 遺跡の立地環境：千曲川右岸の長丘丘陵裾部から  
 低地部に立地する。

### 発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
9.1 ~ 10.30	2,568m <sup>2</sup>	鶴田典昭 小林伸子

### 検出遺構

遺構の種類	数	時期
溝 跡	1	弥生
土 坑	1	古代
遺物集中	2	古代

千曲川右岸の長丘丘陵東側裾部から低地部標高  
 343m ~ 347m 付近に立地する。

西側には壁田城跡が存在し、北方 650m には城  
 の主郭がある。「ねごや」という地名は、山城に  
 関わる場所に比較的多く存在するため、壁田城跡  
 に関連した遺跡であると考えられていた。『長野  
 県中野市遺跡詳細分布図』にも中世の遺跡と記載  
 されている。(中野市教育委員会 2006)

発掘調査は、遺物が集中して出土した低地部分  
 を中心に行った。

竪穴住居跡など集落跡を特徴づける遺構は発見  
 できなかったが、平安時代の土坑と考えられる遺  
 構と遺物集中などの遺構を確認した。平安時代の  
 遺物が出土した粘土層は、耕作痕と思われる土層  
 の乱れが認められたため、植物珪酸体（プラント  
 オパール）分析を行った。結果、かなり狭い範囲  
 でイネ属の植物遺体が若干検出された。平安時代  
 に水田があった可能性を考える必要があるが、  
 確証には至っていない。



図 30 ねごや遺跡の位置 (1 : 50,000 中野)

### 出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文早期 (楕円押型文土器) 弥生後期 (土器) 古代 (土師器、須恵器) 中世 (内耳土器)

調査範囲は遺跡の南端に位置しているため、集  
 落跡の中心や、遺構・遺物が残された経緯等の確  
 認はできなかった。

一方で、縄文土器、弥生土器が出土したことは、  
 ねごや遺跡には中世以前から人びとの営みがあっ  
 たことを示す。 [小林伸子]



図 31 遺物集中 (SQ01) 遺物出土状況

あさかわせんじょうち いせきぐん  
**(5) 浅川扇状地遺跡群**

みわちく  
**三輪地区**

(新県立大学施設整備事業)

所在地及び交通案内：長野市三輪 8-49-7 ほか  
 長野県短期大学構内

長野電鉄本郷駅から北西方向約 500 m。

遺跡の立地環境：飯縄山を源流とする浅川の堆積作用で形成された扇状地扇央部西寄りに立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
4.7 ~ 11.30	6,000㎡	長谷川桂子 大澤泰智

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	17	弥生・古代
掘立柱建物跡	1	弥生
墓跡	3	弥生
溝跡	10	古墳・古代ほか
土坑	300	縄文～古代
遺物集中	2	縄文・弥生

遺跡の概要

浅川扇状地遺跡群は長野盆地の北西部に位置する。調査地は、浅川東条を扇頂に南東方向に広がる扇央部分で、南東方向に傾斜する地形にあたり、標高は約 387 ~ 390 m を測る。この扇状地上は、



図 32 調査区遠景 (南西から)

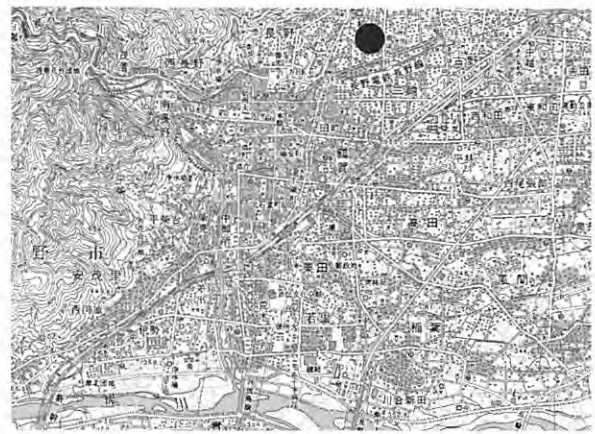


図 33 浅川扇状地遺跡群三輪地区の位置 (1:50,000 長野)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文晩期 (土器) 弥生後期 (土器) 古墳中期 (土器) 平安 (土師器、須恵器、灰釉陶器) 中世 (青磁)
石器	弥生 (凹石、剥片ほか)
金属製品	古代 (刀子ほか)
骨・歯	古代 (獣)
木製品	古代 (板状)

古代から現代まで人々の生活の場として利用されるほど生活環境が良く、いくつもの遺跡が確認され発掘調査も数多く実施されている。

氷式土器の出土

検出面で縄文時代晩期終末 (氷式) の深鉢が出土した。器形の半分ほどが形を留めて出土しており、状態から土器棺墓と考えられるが、内部から骨や歯は出土しなかった。ほかに縄文時代に属す



図 34 土器棺墓と想定される深鉢



る遺構はなく、数点出土した縄文土器片は調査区外より流れ込んだものと推測される。

#### 弥生時代吉田式期集落の発見

後期前半の吉田式期の土器が出土した竪穴住居跡がみつかった。多くは、6m×4mほどの規模を測り、隅丸長方形の形状で4本の主柱穴と地床炉をもつ。主軸が8mほどの比較的大型の竪穴住居跡もみつき、主柱穴が6本確認された。柱穴は径20cm～40cmで深さは20cm～30cmほど掘り込まれ、地床炉は北側2本の柱穴間に配置される。SB09とSB17では主柱穴のほかに、北側に棟持柱的な穴と南側に入口施設と考えられる土坑を併せ持つ。4本の主柱穴をもつ住居跡と、6本の主柱穴をもつ大型の住居跡、また住居跡内でみつかった入口施設や炉の位置など、浅川扇状地遺跡群長野吉田高校グランド遺跡（註1）で調査されたものと類似しており、当該期の特徴的な住居の形状といえる。

SB04からは、壺の頸部から肩の部分の逆位で埋設した土器埋設炉が出土した。浅川扇状地遺跡群からはあまり発見されておらず特異な例である。

竪穴住居跡のほかに掘立柱建物跡ST01が1棟みつかった。棟持柱をもち2間×1間の構造で、棟持柱を含めて8m×2mほどの規模である。柱穴の埋土から、吉田式期の壺胴部の破片が出土している。棟持柱をもつ掘立柱建物跡の発見は県内の弥生時代の遺跡では類例が少なく、特別な建物であった可能性が考えられる。



図 35 弥生時代の竪穴住居跡 SB17

建物跡のほかに土器棺墓が2基みつかった。1基は甕と壺を合わせ、さらに外側を土器の破片で覆うような形状であった。合わせた土器の大きさは全長80cm程度で、成人を葬るのであれば再葬が考えられる。しかし土器棺内からは葬られた人物の手掛かりとなるような骨や歯、副葬品の類は出土しなかった。



図 36 SB04 土器埋設炉



図 37 弥生時代の掘立柱建物跡 ST01

#### 溝跡から出土した完形土器

古墳時代中期の完形の小型丸底土器や高坏の破片などが溝跡SD01からみつかった。溝跡は北東から南西方向に傾斜しており、深さは調査面から10cm程度である。遺物は溝幅のやや広くなった場所で集中して出土した。遺物の出土状態から、祭祀的な行為をしていた可能性も考えられる。



図 38 小型丸底土器

### 古代の竪穴住居跡と溝跡

平安時代の竪穴住居跡が 10 軒見つかった。多くが隅丸方形で 3 m～4 m 四方と、弥生時代一般の住居跡と比較すると規模が小さい。しかし、この時期の住居跡の埋土には多くの遺物が含まれている。器種として壺や甕、坏や鉢などが出土しているが、中でも坏の出土が多い。

住居跡の床面で Pit は複数検出できたが、位置や掘り込みから柱穴と判断できるものは少なかった。また、SB05 では床面で 3ヶ所焼土跡が見つかり、刀子とみられる鉄製品が数点出土した。SB15 では完形の坏が 3 枚重なった状態で出土した。

ほかに、幅 2.5 m 深さ 0.8 m ほどの溝跡 SD03 が見つかった。北から南方向に傾斜しており、ゆるやかに蛇行する。埋土からは長頸瓶の破片や高坏の脚、獣骨などが出土した。土器はまばらに出土し、その多くが摩耗により器種や時期が判別できない。また器種は不明だが、板状の木製品も数点みついている。時期が判別できる遺物には、奈良時代以前のもが多くを占める傾向がみられる。竪穴住居跡と比較すると、やや古い時期に埋没した溝跡と推測されるが、所属時期の詳細は不明である。

註 1 長野市教育委員会 1987 『長野吉田高校グラウンド遺跡』  
 註 2 長野市教育委員会 1993 『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』

### 調査の成果と課題

今回の調査で、三輪地区ではみつかっていなかった弥生時代後期前半吉田式期の集落を確認できた。この発見から浅川扇状地上の該期の集落の広がりを検討できる新資料が得られた。

弥生時代後期の掘立柱建物跡は、周辺の遺跡においても、多数みついている竪穴住居跡に対し、わずか数棟しか確認されていない遺構である。また棟持柱をもつ建物は、当時祭祀に利用されていたかは断定できないが、遺構数の少なさから特殊な建物であったことは間違いのないであろう。

古墳時代は建物跡などがみつからず、小型丸底土器などが出土した祭祀を行った可能性のある溝跡のみが見つかった。調査地から北方向約 500 m にある本村東沖遺跡長野高校地点（註 2）では、古墳中期の大規模な集落跡が見ついている。当該期における生活域と祭祀域の関連性を検討していく必要がある。

古代の集落跡は、遺物から 9 世紀中頃から後半期に限定されることから、短い時期に存続していたことが推測される。集落の変遷には、地形や自然環境、社会的背景など様々な要因が考えられる。この地域の集落変遷の要因を社会的背景とともに検討していくことが今後の課題である。

[大澤泰智]



図 39 古代の溝跡 SD03



あさかわせんじょうち いせきぐん  
**(6) 浅川扇状地遺跡群**  
 きりはらちく  
**桐原地区**

(県道高田若槻線関連)

所在地及び交通案内：長野市桐原 2-13 ほか  
 長野電鉄桐原駅から東約 200m。

遺跡の立地環境：飯縄山を水源とする浅川によっ  
 て形成された扇状地上に立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
4.6 ~ 11.30	2,606㎡	西香子、鈴木時夫、福井優希

検出遺構

遺構の種類	数(総数)	時期
竪穴住居跡	18 (205)	弥生、古墳、奈良・平安
墓	3 (10)	古墳
溝跡	15 (78)	弥生、古墳、古代、中近世
土坑	115(1351)	弥生～中世

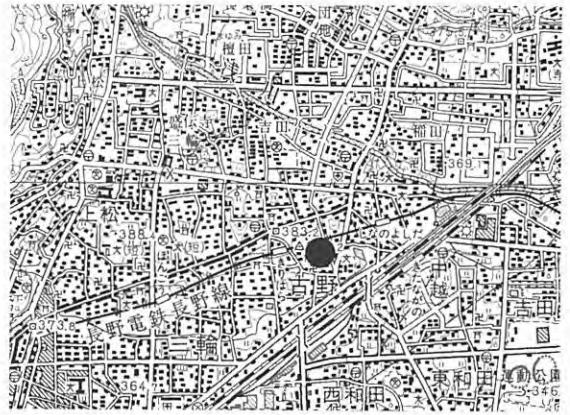


図 40 浅川扇状地遺跡群桐原地区の位置 (1:50,000 長野)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	弥生後期 (土器) 古墳前期～中期 (土師器、須恵器) 奈良・平安 (土師器、須恵器、灰釉陶器) 中・近世 (徳利、灯明皿、泥めんこほか)
石器・石製品	弥生 (磨製石斧) 古墳 (石製模造品ほか) 古代～中世 (砥石)
金属製品	中・近世 (銭貨ほか)
骨	古墳以降 (獣骨)



図 41 調査区遠景 (南から)

平成 23 年度から開始した発掘調査も 5 年目。今年度は、清林寺の南から北長野通りの間の事業用地を中心に発掘を行った。

### 弥生～古墳時代の住居と墓

弥生時代の竪穴住居跡 4 軒を検出し、出土土器から後期箱清水式期に帰属することがわかった。住居跡の床面からは、完全な形に近い赤彩された高坏などの遺物が出土した。

古墳時代は竪穴住居跡 4 軒、溝跡 10 条、墓跡 3 基、土坑 87 基を検出した。

墓跡 3 基は、出土した土器から前期に帰属する

と考えられる。いずれも後世の削平等により墳丘推定部が失われ、周溝のみが検出された。周溝は 3 基とも東側部分が調査区外になり、全体を調査することはできなかったが、大きいもので外側が 1 辺約 18 m の方形になると推定される。

3 基のうち、SM3004 とした墓跡の周溝からは土器の破片が多数出土した。なかでも注目されるのは、周溝の底からみつかった坏部口縁外面と脚部裾に直線文や山形文を施した高坏である。同様な模様をもつ高坏は東海地方の西部を中心に分布しており、それらの地域との交流を考える上で、貴重な発見といえる。



図 42 住居跡床面から出土した弥生時代高坏



図 43 周溝 (SM3004) から出土した高坏  
矢印部分に模様が施してある



図 44 3 基の墓跡 (人が並んでいるところが周溝)





図 45 石製模造品  
左から完成品（上）、未完成品（下）、右は製作時の破片

竪穴住居跡 4 軒は、3 軒が中期、1 軒が前期に帰属する。そのうち SB3062 とした中期の竪穴住居跡床面から石製模造品が見つかった。そのうちわけは、有孔円板や勾玉や白玉の石製模造品の完成品が 9 点、未完成品が 172 点、破片が 3850 点である。見つかった玉の中には直径 2mm 程のものも含まれ、かなり小さいものがある。製作に使った道具は発見されなかったが、住居内で石製模造品を製作していた可能性は高いといえる。

同様な事例としては、同じ浅川扇状地遺跡群内の本村東沖遺跡長野高校地点に 2 軒の石製模造品を製作したとされる竪穴住居跡の報告がある。そこでは 27 号住居址に石製模造品の製作に使われたと考えられる工作用ピットの検出あり、36 号住居址では、剣や勾玉、有孔円板の未完成品が 125 点も出土している。（註 1）

これらの遺跡では竪穴住居跡の検出数に対して、石製模造品製作に関連した施設が極めて少ない特徴がある。本遺跡では 31 軒中 1 軒、本村東沖遺跡では 58 軒中 2 軒の竪穴住居跡であった。石製模造品製作に係わる集落内の技術者、あるいは技術者集団の有り方を考える上で貴重な発見となった。

#### 古代以降の様子

古代は竪穴住居跡 10 軒、溝跡 3 条、土坑 24 基を検出した。遺物としては土師器の坏や灰釉陶器の碗、須恵器の甕の破片などが出土した。

また、中世以降は溝跡 2 条や土坑 4 基を検出した。遺物の出土がほとんどなく、明確な時期は不明だが、遺構の重複関係などから中世以降に帰属すると考えられる。

珍しい遺物としては、中世の泥めんこの出土があった。

〔鈴木時夫〕

註 1 長野市教育委員会 1993『本村東沖遺跡』



図 46 泥めんこ

# い で が わ み な み い せ き (7) 出川南遺跡

((都) 出川双葉線)



図 47 出川南遺跡の位置 (1 : 50,000 松本)

所在地及び交通案内：松本市出川町 20 ほか

JR 南松本駅周辺、双葉・芳野・出川町に広がる。

遺跡の立地環境：奈良井川扇状地と田川・牛伏川

扇状地が接する合流扇状地の末端に立地する。

## 発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
4.15 ~ 5.29	165m <sup>2</sup>	綿田弘実・片山祐介

## 検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴状遺構	2	古墳・中世
掘立柱建物跡	3	中世
土坑	2	中世
溝跡	6	中世
小溝跡	8	中世
畝跡	1	中世
ピット	161	中世

## 出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	弥生(土器) 古墳(土師器・須恵器)
石器	時期不明(黒曜石剥片)

## 遺跡の概要

出川南遺跡は松本市域のほぼ中央、田川と牛伏川の合流点左岸に位置する。北は出川西遺跡、南は平田北遺跡が隣接し、周辺一帯の遺跡群を構成している。田川を隔て、東方約 1.5km の中山丘陵突端には県下最古とされる弘法山古墳がある。

昭和 61 年度の第 1 次調査以来、26 次の調査が行われてきた。その結果、弥生中期から平安までの住居跡 600 軒以上を中心に、古墳中期の平田里古墳群を含む縄文晩期から弥生、中世までの墓域などが確認されている。

## 本年度の調査成果

調査地点は、前年度実施した第 24 次調査の西隣

に位置する。前年度は平安から中世の第 1 面、弥生後期から古墳中期の第 2 面を調査したが、今回も連続する土層を確認した。ただし、第 2 面は西半に南西 - 北東方向の流路とみられる砂礫が堆積しており、遺構分布は東半のみに限定された。第 1 面では、中世の掘立柱建物跡とみられるピット群が見つかった。その直下では、竪穴状遺構 1 基と溝 2 条を検出した。竪穴状遺構からは、古墳中期の須恵器(壺)が出土した。また同じ層中から単独で須恵器(杯)、土師器(長胴甕)、第 2 面を被覆している上述の流路中からは土師器(杯)が出土し、いずれも古墳後期とみられる。第 2 面で検出された遺構は溝 2 条のみで、栗林期の土器片が出土している。以上から第 1 面下層から第 2 面までは 5 ~ 6 世紀、第 2 面以下は弥生時代に該当する。この年代観は放射性炭素測定結果とも整合する。

調査区中央付近から西は奈良井川の支流と考えられる流路が北流していることから、古墳時代の集落の中心は昨年度調査地点および 22・23 次調査地点にあたる南東方向にあったと考えられる。本調査地点は集落近傍を流れる奈良井川の河川敷付近であり、全面的な遺跡形成は流路が完全に被覆された中世以降と考えられる。 [片山祐介]



図 48 掘立柱建物跡、溝跡、土坑(第 1 面)



## (8) りゅうげん じ あと 龍源寺跡

(国道 256 号関連)

所在地及び交通案内：飯田市上久堅

国道 256 号線水神橋より約 5km。

遺跡の立地環境：伊那山地より延びる尾根の先端

に形成された谷状地形。標高約 650m。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
4.9 ~ 8.11	1750㎡	河西克造 腰地孝大

検出遺構

遺構の種類	数	時期
礎石建物跡	1	中世
井戸跡	1	中世
土坑	35	中世、近世
溝跡	7	中世、近世
焼土跡	3	中世
石積み	1	近代
竪穴状遺構	1	近代



図 49 龍源寺跡の位置 (1 : 50,000 時又)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器、陶磁器	中世 (古瀬戸碗・皿・卸皿、内耳土器等)
石器	縄文 (打製石斧)
石製品	近世 (硯、砥石)
金属製品	中世 (銭貨)、中・近世 (刀子、釘)
その他	時期不明 (鉄滓、黒曜石、瓦)

### 中世の礎石建物跡発見

龍源寺跡は、天竜川左岸地域の山間地である上久堅地区に所在する。調査地は谷状地形であり、南東 (谷状地形の奥) から北西方向に緩やかに傾斜している。この調査地の北西端は崖状に傾斜しており、その眼下には玉川が流れている。

遺跡の南西には、細田川をはさみ神之峯城跡が



図 50 調査区遠景

位置する。神之峯城は、中世に天竜川左岸地域を治めた国人領主である知久氏の本城である。

大正年間に、郷土史家の市村威人氏が上久堅地区の地形や小字を調査し、18ヶ所の寺院の存在を推定した（「知久十八ヶ寺」）。今回の調査地は、その1つ、「龍源寺」の推定地である（註1）。

国道256号線改築事業に先立ち、平成26年度に飯田市教育委員会が試掘調査を実施し、礎石や土坑を検出した。この結果、保護の必要があると判断し、当センターが発掘調査を実施した。

その結果、谷状地形の中を大規模に造成していることが明らかになった。調査地南東側の谷状地形の奥では傾斜地を削平し、調査地北西の崖際では1m以上の盛土を行うことで平坦地を造り出している。

平坦地上の礎石建物跡（ST01）は、3間×3間の総柱建物と想定できる。礎石は1.2m～2.2m間隔で並び、建物跡の規模は北西－南東方向5.7m、北東－南西方向5.3mを測る。この礎石で囲まれた内部には、礎石を設置する際に叩き締めた痕跡が認められる。

礎石検出時に出土した古瀬戸後期の碗や縁釉小皿から、ST01の時期は15世紀中頃から後半に比定されよう。またST01の礎石近くでは、直径2～5cm、厚さ約2cmの河原石が約40点出土している。この石の性格については、今後検討する予定である。

土坑はST01周辺に点在しており、そのうちST01南側には礎盤石が設置された土坑が確認さ

れた。

井戸跡は調査地南東側に位置している。直径約60cmの石組み井戸で、検出時に内耳土器が出土している。

溝跡は、調査地の傾斜に平行するものと直交するものがある。このうち後者は、調査地中央に水が流れ込まないように排水する機能があったと推測される。

### 中世における上久堅地区の様相

知久氏が神之峯城に入城した時期は、それを示す中世の文献史料が確認されていないため不明であるが、市村氏は文亀・永正年間（16世紀初頭）頃と推定している（註2）。

ST01の構築には大規模な造成を伴うことから有力な国衆が関わっていたと考えられるが、知久氏入部以前に上久堅地区を治めた国衆の存在を示す史料は確認されていない。このことから知久氏の神之峯入城が15世紀に遡る可能性がある。

平成24・25年度に埋文センターが実施した神之峯城跡の発掘調査で、15～16世紀に比定される礎石建物跡を検出した。神之峯城跡の調査成果を踏まえたうえで、知久氏が上久堅地区へ進出した時期と地域形成の様相を考古学的に検証することが今後の課題である。 [腰地孝大]

註1 市村威人1925「神之峯城址」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯

註2 市村威人ほか1970『下伊那史』第6巻室町時代 下伊那誌編纂会



図51 礎石建物跡（南西から）  
礎石の上と柱の推定位置に模擬柱を置いている



図52 調査地北西の盛土の状況



### Ⅲ 整理等作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
ちけ 地家ほか	佐久市	中部横断自動車道	佐久南 IC～八千穂 IC 間 32 遺跡の記録類・調査所見・遺物の整理。遺構図修正、デジタルトレス、注記、遺物選別、接合。	本文参照
しおぎきいせきぐん 塩崎遺跡群	長野市	坂城更埴バイパス	遺物の洗浄および注記。	出土遺物の洗浄および注記を実施した。
びわじま 琵琶島 へきたじうせき 壁田城跡 ねごや	中野市	県道豊田中野線	遺構図編集、デジタルトレス、遺物選別、遺物実測・トレス、原稿執筆、報告書編集発行。	琵琶島遺跡は弥生時代中期後半（栗林 1 式）のほぼ単純型式の遺跡である。植物の花序を施文した文様の土器や、再利用の磨痕がある土器片などが出土した。遺構は住居跡 2 軒、円形・馬蹄形の周溝跡 3 基を調査し、北陸地方との系譜を検討する要素が加えられた。 壁田城跡は中世および近世の山城に関わる遺構・遺物は検出されなかった。 ねごや遺跡は、平安時代前半期の土器遺物集中が出土した。プラント・オパール分析の結果、水田の存在は確認できなかった。
みなだいほら 南大原	中野市	県道三水中野線	遺構図修正、デジタルトレス、遺物実測・トレス、原稿執筆、報告書編集発行。	縄文時代前期後半の南大原式（諸磯 a 式）の標識遺跡として知られているが、調査では、縄文時代前期後半の竪穴状遺構と土坑の 3 基確認したのみで、弥生時代の遺物、遺構が圧倒的に多く、古墳時代初頭前後の方形周溝墓 1 基が確認された。 弥生時代中期後半の栗林 2 式新段階を中心とした集落跡である。遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡と礎床木棺墓、木棺墓、土器棺墓が主である。集落域を分断するような大溝（自然流路）があり、溝底には多量の土器破片と石器などが出土した。 弥生時代中期後半の竪穴住居跡の中に炉跡とは別に床面の火床が確認され、鍛冶関連の石製工具類と想定される台石・敲石・砥石、粘土塊などの遺物が出土した。
あさかわせんじうち 浅川扇状地 きりほらちく 桐原地区	長野市	県道高田若槻線		本文参照
あらじうみね 新城峰	立科町	宇山バイパス	遺構図修正、デジタルトレス、遺物選別、遺物実測・トレス、写真撮影、原稿執筆、報告書編集発行。	遺跡は立科町山部に所在し、周囲を谷に囲まれた尾根上に立地する。調査の結果、尾根頂部から東側緩斜面で中世の集落跡が発見された。検出遺構は竪穴状建物跡 3 軒、掘立柱建物跡 1 棟などである。出土遺物は少なく、ほとんどが内耳鍋で少量の土師質皿がある。陶磁器類は大窯の稜皿が 1 点出土したのみである。他に銭貨が 1 枚出土した。検出遺構の状況や出土遺物からみて、新城峰遺跡の中世集落は 16 世紀後半の短期間に営まれた小規模な集落といえる。
かいがんじ 海岸寺	松本市	通常砂防	遺構図修正、デジタルトレス、遺物選別、遺物実測・トレス、写真撮影、原稿執筆、報告書編集発行。	平坦地は近世以降の耕地造成と判明した。縄文、平安、中世の遺構が削平され、地形改変をまぬがれた地点から平安住居跡と、造成後に掘り込まれた近世土坑墓を検出した。出土した縄文土器は前期末葉にまとまり、松本盆地で集落が増加する時期に対応する。平安の遺物集中は 80% 以上を食膳具が占め、一般的な集落遺跡例とは著しく異なる。湧水信仰に関わる儀礼を行った場と推定した。平坦地に構築された石垣はおおむね近世後半以降と判明したが、調査事例がなく、地域の近世・近代史を明らかにする上で今後活用されよう。
かんのみねじう 神之峯城 ほか	飯田市	飯橋道路	遺構図修正、デジタルトレス、遺物選別、遺物実測・トレス、写真撮影、原稿執筆、報告書編集発行。	鬼釜遺跡では縄文時代の集落、鬼釜古墳では、6 世紀の馬の埋葬土坑、風張遺跡では尾根上に構築された掘立柱建物跡、神之峯城跡では寺院（堂宇）と推定できる中世後半の礎石建物跡などが調査された。馬の埋葬土坑の発見は、伊那谷の馬匹文化を考える上で重要な調査事例となった。神之峯城跡は伊那谷の天竜川左岸を治めた国人領主である知久氏の本城で、今回初めての発掘調査となった。近接する風張遺跡と鬼釜遺跡でも中世と推測できる遺構が確認できた。従来、飯田地域においては、天竜川左岸の調査事例が少ない。国人領主の本拠の様相を考える上でも、重要な調査事例となった。

# (1) 地家遺跡ほか

(中部横断自動車道関連)

**整理対象遺跡** 中部横断自動車道（佐久・小諸JCT～八千穂IC）建設事業地内の埋蔵文化財については、佐久南ICより北部の発掘調査報告書の刊行を平成26年度までに終え、佐久南IC以南部分を発掘作業と併行し整理作業を一部進めてきた。佐久南IC～八千穂IC間の発掘調査遺跡は、佐久市北畑遺跡群から佐久穂町馬越下遺跡まで31遺跡あり、①桜井・伴野地区（5遺跡：北畑遺跡群、仁東餅遺跡、北裏遺跡群、西東山遺跡、東山遺跡）、②小宮山・前山地区（6遺跡：小山の神B遺跡、高尾A遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡、荒城跡、月明沢岩陰遺跡群）、③大沢地区（5遺跡：地家遺跡、兜山遺跡、大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡、三枚平B遺跡）、④臼田地区（10遺跡：滝ノ沢遺跡、寺久保遺跡、庚申塚、台ヶ坂遺跡、上滝・中滝・下滝遺跡、和田遺跡 和田1号塚、滝遺跡、家浦遺跡、田島塚、水堀塚）、⑤佐久穂地区（5遺跡：奥日影遺跡、小山寺窪遺跡、上野月夜原遺跡、満り久保遺跡、馬越下遺跡）の5地区に区分した。

**整理作業の概要** 昨年度は地家遺跡の整理を実施したが、本年度は対象を他30遺跡にも広げ、記録類や遺物の全体量とその内容の把握を行った。

発掘調査において作成した図面・写真・台帳等の記録は、点検・照合し、台帳の不備を整えるとともに、遺構図や土層図等の必要な図面修正を施した。出土遺物は保管状況を確認し、種類別に仕分け直し、その上で遺物台帳等の整備を実施した。

これにより明らかになった31遺跡の遺物量は、土器類592箱、石器類164箱、金属器類36箱、骨類37箱、木製品他188箱、炉壁他19箱、種子・礫・土壌他82箱の合わせ1118箱に、五輪塔・宝篋印塔894点・板碑7箱（地家遺跡出土）を数える。

整理対象31遺跡の全体把握と併行して、昨年度に発掘作業を終えた大沢・臼田地区に所在する各遺跡については、先行し整理作業を進めた。

遺構については調査所見を整理し、各遺構の概要を把握できるように時期や特徴等の情報を整備した台帳作成を実施。また、修正図をもとにデジタルトレースを行い、報告書に掲載する個別遺構図、遺構全体図、土層柱状図、周辺遺跡分布図等の作成を進めた。

遺物については、小型石器の注記と台帳作成を、大沢・臼田地区に加え、小宮山・前山地区について実施したほか、報告書に掲載する遺物の抽出、登録、土器接合に着手した。

**報告書の刊行** 発掘作業は本年度をもってすべて終了し、報告書作成に向けた整理作業を本格的に実施できる環境が整いつつある。整理対象とする31遺跡については、前述の桜井・伴野地区、小宮山・前山地区、大沢地区、臼田地区、佐久穂地区の5地区に分けて報告書を刊行してゆく予定である。  
〔伊藤友久 若林 卓〕



図53 中部横断自動車道関連遺跡



## (2) 浅川扇状地遺跡群桐原地区

(県道高田若槻線関連)

**整理作業の概要** 浅川扇状地遺跡群(桐原)は平成23年から発掘調査を実施している。26年度までに以下の各時代の遺構を検出した。

遺構 \ 時期	弥生後期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	奈良平安	中世
竪穴建物跡	19	22	5	4	127	0
墓	1	2	0	0	1	6
溝跡	2	2	0	0	11	2

今年度、発掘調査に並行して既に調査の終了している26年度分について本格整理作業を開始した。主な作業は、遺構図の点検、修正、トレース指示図の作成、遺構の計測および観察表作成、土器の観察、分類、選別、復元などを行った。また、個々の遺構について、時期の検討、事実記載を進めた。

**柱穴上に敷かれた土器** 弥生時代後期の竪穴建物跡19軒のうち、集落域の最北端に位置するSB6002に特殊な事例があるので、整理途中ではあるが報告する。

SB6002は隅丸長方形で、規模約4.2m×2.3mを測る。床面遺物が少なく、遺物が集中して出土しているのは支柱穴4本のうちの1本(ピット2)の上部だけである。この柱穴の検出時、柱穴の上部から約10×15cmの礫が半分埋まって出土し、それを中心にして内面を上に向けた土器片が花弁状に敷かれたような状態で出土した。土器は接合、復元した結果、3～4個体の壺と甕の破片であるとわかり、破片を集めて、意図的に敷いたと考えられる。(図55)

同様の出土事例としては、佐久市西近津遺跡群のSB59住居跡で、柱穴内に複数個体の壺の破片が敷かれて出土した事例が確認できた。(註1)

遺物の出土状況は異なるものの、柱穴からの遺物の特殊な出土例としては、浅川扇状地遺跡群の中では、今回の調査地区の北東側にあたる吉田高校グラウンド遺跡の11号住居跡で、柱穴内に完形

に近い土器1個体を埋設する事例がある。(註2)

また、県外の特異な出土例としては、横浜市大塚遺跡のY32号住居跡では4基の支柱穴のうち、2基から壺の破片が柱穴内からまとまって出土している事例もみられる。(註3)

今回、上記のような類似例を収集した結果、柱穴に対する遺物の埋設行為には複数のパターンがある。このような行為は住居の廃絶に関連しているとする研究報告がある。(註4)当遺跡の柱穴上に敷かれた土器も住居廃絶に伴う柱穴の遺物埋設行為の一つと考えられ、今後も本報告作成にあたり、類似例の収集を進め、検討していきたい。

[高津希望]

- 註1 長野県埋蔵文化財センター2014『西近津遺跡群 遺構編』(図版46参照)  
 註2 長野市教育委員会 2001『長野吉田高校グラウンド遺跡II』(p10-12参照)  
 註3 横浜市埋蔵文化財センター1991『大塚遺跡 遺構編』(p206-209、図版56、57参照)  
 註4 正洋樹2014「弥生集落における放棄—廃絶に関する一考察」『相模原市立博物館研究報告 第22集』



図54 SB6002の完掘写真



図55 ピット2上に敷かれた土器と礫

## Ⅳ 普及公開活動の概要

### (1) 国庫補助事業の概要

平成 27 年度国庫重要文化財等保存整備費補助金

#### 1 体験学習等メニュー

##### ①夏休み考古学チャレンジ教室の開催

実施日：8月7日（金）・8日（土）

内 容：センターの業務を公開し、文化財保護思想の啓発をはかる。

- ・埋蔵文化財に関わる業務の体験と見学
- ・発掘調査に伴う出土品の展示
- ・体験教室（土器の接合・拓本・実測・撮影・まが玉作りほか）
- ・参加者 307 名



図 56 土器の接合に挑戦

##### ②発掘体験の実施

実施日：5月8日（金）、6月9日（火）、22日（月）、7月15日（水）～16日（木）

内 容：遺跡の発掘体験を通じて、地域の文化財への関心を呼び起こし、大切さを学ぶ。

参加者：長野市立通明小学校 6 年生 31 名  
南相木村立南相木小学校・  
北相木村北相木小学校 6 年生 34 名  
長野市立吉田小学校 6 年生 33 名  
上水内郡栄村立栄小学校生徒 27 名

#### 2 広報・資料作成メニュー

##### ①信州の遺跡

内 容：県内の遺跡情報を掲載し、文化財に親しみ、大切さを考える。

【第7号】10月28日（水）発行



図 57 遺跡の発掘体験

- ・特集 長野県の弥生時代の金属器
- ・最新報告書から（長野市長野女子高校校庭遺跡、佐久市西近津遺跡群、長和町鷹山遺跡群史跡星屑峠黒曜石原産地遺跡、飯田市黒田八幡原遺跡、松本市出川西遺跡）
- ・埋文キーワード 保存処理
- ・埋文本棚 信濃の風土と歴史、矢出川
- ・珍しきもの 鴨徳利（長野市浅川扇状地遺跡群）
- ・考古学の窓 戦争遺跡

【第8号】平成28年2月5日（金）発行

- ・特集 近世の城郭遺跡から出土した宝物（長野市松代城跡附新御殿跡、上田市上田城跡、松本市松本城跡三の丸土居尻第6次調査、飯田市飯田城下町遺跡）
- ・最新調査から（栄村ひんご遺跡、長野市塩崎遺跡群、三才田子遺跡、浅川扇状地遺跡群、松本市高畑遺跡、佐久市藤ヶ城跡、飯田市龍源寺跡）
- ・珍しきもの 土偶（ひんご遺跡、塩崎遺跡群）
- ・出土品展 掘るしん 2016 in しなのい
- ・考古学の窓 井戸とモモ

##### ②かがみちゃんと学ぼう ジュニアこうこがく

内 容：新しく歴史を学ぶ県内の小学生を対象に遺跡や遺物を用いた教材

【第3号】平成28年2月12日（金）発行

- ・木簡を調べようー古代の文字は語るー
- ・木簡が展示されるまで
- ・木簡はどう使うの



- ・木簡の使われた時代を調べよう
- ・奈良時代の産物あれこれ

### 3 解説板メニュー

設置日：平成 28 年 3 月 11 日（金）  
 場 所：上田市住吉（玄蕃山公園）  
 内 容：上田市陣馬塚古墳の遺跡解説板の設置  
 協 力：上田市、上田市教育委員会、長野県教育委員会

### 4 埋蔵文化財センター展示会

#### ①速報展の開催

名 称：長野県埋蔵文化財センター、長野県立歴史館、長野県伊那文化会館、安曇野市豊科郷土博物館

名 称：速報 長野県の遺跡発掘 2015

内 容：平成 26 年度に調査された遺跡を中心に 15 遺跡 385 点（うちセンター分 5 遺跡 166 点）を展示・公開。

#### ○長野県立歴史館会場

開催日：5 月 30 日（土）～7 月 12 日（日）

見学者：8,281 名

埋文体験デー：7 月 4 日（土）参加者 77 名

#### ○長野県伊那文化会館会場

開催日：7 月 25 日（土）～8 月 23 日（日）

見学者：1,388 名

埋文体験教室：8 月 22 日（土）参加者 472 名

#### ○安曇野市立豊科郷土博物館会場

開催日：9 月 19 日（土）～10 月 18 日（日）

見学者：1,595 名

#### ②出土品展の開催

##### ○掘るしん 2016 in しののい

開催日：平成 28 年 2 月 14 日（日）～19 日（金）

会 場：センター展示室

テーマ：地域と交流の考古学

内 容：平成 27 年度センター調査遺跡を中心に 11 遺跡 189 点の出土遺物を展示・公開。

見学者：265 名



図 58 出土品展の様子

##### ○掘るしん in 佐久

開催日：11 月 28 日（土）

会 場：佐久市佐久平交流センター

内 容：中部横断自動車道建設に伴う佐久市内の発掘調査遺跡の基調報告及び資料展示（西一里塚遺跡、森平遺跡、周防畑遺跡群、西近津遺跡群の 5 遺跡 53 点）

##### ③長野県庁ロビー展等の開催

##### ○長野県庁見学イベント

開催日：7 月 29 日（水）参加者：200 名

会 場：県庁講堂

内 容：「縄文服」を着用しての写真撮影など

##### ○長野県庁ロビー展

開催日：11 月 16 日（月）～20 日（金）

会 場：県庁講堂

内 容：長野市塩崎遺跡群出土遺物の展示・公開

##### ④講演会・遺跡報告会

##### ○「速報 長野県の遺跡発掘 2015」

<長野県立歴史館会場>

##### ・講演会

開催日：5 月 30 日（土）聴講者：258 名

場 所：長野県立歴史館講堂

演 題：卑弥呼の時代からヤマト王権へ

～その時、シナノに何が起きたか～

講 師：大塚初重（明治大学名誉教授）

##### ・遺跡報告会

開催日：6 月 6 日（土）聴講者：60 名

場 所：長野県立歴史館講堂

内 容：長野市塩崎遺跡群、佐久市西近津遺跡群ほか

<安曇野市豊科郷土博物館会場>

・講演会

開催日：9月20日（日） 聴講者：124名  
場 所：豊科交流学習センター「きぼう」  
演 題：信州の弥生文化と西日本  
講 師：石川日出志（明治大学教授）

○ 中部横断自動車道建設に伴う発掘調査成果報告会「掘るしん in 佐久」

・講演会

開催日：11月28日（土） 聴講者：111名  
場 所：佐久平交流センター第5会議室  
演 題：信州人の一万年-骨から歴史をみる-  
講 師：茂原信生（京都大学名誉教授）

・シンポジウム

パネリスト：茂原信生、基調講演報告者  
内 容：人骨と遺跡研究の成果を相互に検証

○ 長野県埋蔵文化財センター出土品展

・講演会

開催日：平成28年2月14日（日）  
聴講者：124名  
場 所：JA グリーン長野グリーンパレス  
演 題：玉とヒスイからみた交流  
土器の胎土分析からみた交流  
講 師：川崎 保（調査3課長）  
水澤教子（主任調査研究員）

・「縄文服」「縄文仮面」の公開と解説

(2) 現地説明会

現地説明会（見学会）は6遺跡、12回、のべ1,311



図 59 龍源寺遺跡現地説明会の様子

人の参加者があった。以下、主なものを紹介する。

① 龍源寺遺跡（飯田市）

開催日：6月27日（土）晴 見学者：53名

② 浅川扇状地遺跡群桐原（長野市）

開催日：7月18日（土）雨 見学者：142名

③ 浅川扇状地遺跡群三輪（長野市）<見学会>

開催日：7月27日（月）～31日（金）晴  
見学者：280名

④ ひんご遺跡（栄村）

開催日：8月29日（土）晴 見学者：159名  
体験発掘参加者：30名



図 60 ひんご遺跡体験発掘の様子

⑤ 塩崎遺跡群（長野市）

開催日：10月24日（土）晴 見学者 205名  
体験発掘参加者：40名



図 61 塩崎遺跡群現地説明会の様子

⑥ 尾垂遺跡（佐久市）

開催日：11月7日（土）晴 見学者 77名

〔町田勝則 川崎保〕

## 卑弥呼の時代からヤマト王権へ～その時、シナノに何が起きたか～

大塚初重 (明治大学名誉教授)

### 1 はじめに 考古学からみた日本の成立

神話に基づくのではなく、事実に基づいた日本の成立を勉強したいと思ったので、敗戦後、日本に復員して私は古代の天皇の古墳に非常に関心を持った。日本の成立という課題にとって「邪馬台国」の問題は非常に重要である。

### 2 邪馬台国の所在論より年代論

『魏志倭人伝』には、朝鮮半島にあった帯方郡から邪馬台国までの行程や「倭」の生活のことが書いてある。どこまで正しいかわからないが、皇帝が亡くなって改元した景初3年(239)から正始元年(240)に変わるちょうどその年に、邪馬台国の使節が帯方郡を経て魏へ、魏の使節が倭にやってくる月日を書いてある。西晋の著作郎(宮中の歴史編纂官)の陳寿が『三国志』を著したが、フィクションを書く必要はなく、年代は信憑性が高い。

江戸時代にはじまり、明治から昭和にかけても邪馬台国の所在地論争は活発に行われた。「方角の情報が誤っている。東と読み替えるべきだ」として、瀬戸内海を通過して奈良県のヤマトにあるという近畿説と、北九州説がある。考古学界では近畿説が多いが、考古学的事実によってここが邪馬台国だと決定できる資料あるかは疑問だ。むしろ出土した遺物やそれがある遺構の年代論の問題が重要である。

### 3 邪馬台国直前の時代の様相

中野市の柳沢遺跡で、銅鐸5点と銅戈8本が出土した。弥生時代中期後半頃とされる。かつては、弥生時代中期は紀元前100年から紀元後100年の約200年間とされてきた。



図 62 講演会の様子

土器の編年研究が進んだが、放射性炭素 14 による年代測定や年輪年代学から、例えば弥生時代中期後半の大阪府池上曾根遺跡の建物跡から出土した 20 本の柱の根元の年輪を分析して、そのうちの 1 本が紀元前 52 年に伐採したヒノキだとわかった。今まで考えていた弥生時代中期後半の年代が短くて 50 年、長くて 100 年古くなることがわかった。よって、中野市の柳沢遺跡も古くなって紀元前 50 年あるいは紀元前 1 世紀という年代観の見直しが行われることになる。

柳沢遺跡の九州型や近畿型銅戈、畿内的な銅鐸といった青銅器は、まさにその弥生時代中期後半に、長野県北部で祭器として使われていた。つまり、近畿や瀬戸内といったかなり広範な地域で、2,000 年以上前に、各ムラでおこなわれていた祭りの青銅器が、かつて考えていたより古く、長野県の北部まで来ていることになる。

中期後半といえ、群馬県北部の渋川や長野県埋蔵文化財センターで発掘している塩崎遺跡群からもこの時期の礫床木棺墓が出ている。ここまでの、ちょうど邪馬台国が歴史に登場する直前の時代の様相である。



#### 4 邪馬台国の時代

『魏志倭人伝』によれば、卑弥呼が魏に遣使した年代、景初3年(239)に、邪馬台国は狗奴国と戦って魏に救援を求めている。魏は激励するが、正始7~8年(247~248)頃に卑弥呼は亡くなったとある。

センターで発掘している長野市浅川扇状地遺跡群にも方形周溝墓が出てきている。前方後円墳出現直前の盛土した墓は、邪馬台国時代の墓の可能性が高いから重要である。

昭和20年代の後半から40年代にかけて、樺井大塚山古墳から出土した直径20cmを超える大型の三角縁神獸鏡を、魏の皇帝から卑弥呼がもらった鏡、銅鏡百枚に相当するというのが古墳時代研究者の共通した見解だった。

ところが、日本国内の古墳からは出るが、日本以外からは三角縁神獸鏡は出土しない。国産ではなく舶載だというのが、ほとんど中国から出ない。中国にもあるとされるものは、学術的な発掘調査によるものではない。まだ確実とは言えない。

この20年間の考古学の研究で、前方後方墳、前方後方型周溝墓の調査が各地で進んできたが、そこから出土する鏡に注目する。共伴する土器は、奈良県の箸墓古墳から出土した布留0式より古い型式である。定型的な前方後方墳出現前夜に相当する前方後方墳である松本市弘法山古墳からは「上方作系」斜縁四獸鏡、近くの中山36号墳からは同じ上方作系の斜縁六獸鏡が出土している。前方後方墳の沼津市高尾山古墳から破砕鏡の上方作系半肉彫斜縁六獸鏡、千葉県木更津の前方後方墳である高部32号墳から破鏡、隣接する同30号墳から斜縁二神二獸鏡、徳島県鳴門市の西山田2号墳から上方作系の斜縁鏡、京都府園部黒田古墳から双頭龍文鏡、兵庫県龍野市の綾部山39号墳など、いずれも弥生時代の墳丘墓からは、三角縁ではない1枚ないしは2枚の鏡が出ています。

これらの鏡は、朝鮮半島の楽浪で作られたものではないかと朝鮮考古学研究者は指摘する。

三角縁神獸鏡が何十枚も大前方後円墳に入れられる前段階、つまり、2世紀終わりから3世紀の前半は、『魏志倭人伝』によれば後漢の桓帝と靈帝という皇帝の時代に倭国乱れるとある。『梁書』によれば、靈帝の光和年間(178-184)、2世紀後半に、国が乱れて多くの首長たちが共立して女性の卑弥呼を王としたとある。

2世紀の後半から3世紀前半、邪馬台国の時代に日本列島の各地、とくに西部瀬戸内海沿岸から近畿、東海、関東まで含めた各地域の墳丘墓から出土する鏡は、ほとんどすべてが1枚、破砕鏡もしくは破鏡で、三角縁ではない。型式も斜縁二神二獸鏡、上方作鏡の文言で始まる半肉彫獸帯鏡などしかない。

これら三角縁神獸鏡に先行する斜縁二神二獸鏡、上方作鏡系六獸鏡などの半肉彫りの鏡をどうやって朝鮮半島の楽浪から手に入れたか。日本海沿岸、とくに、島根、鳥取から福井、富山、石川、新潟などの「コシ」といわれる地域を重要視すべきだろう。

一方、関東地方の集落跡を掘ると、在地の土器とともに北陸系とされる日本海沿岸の土器が多量に出土する。東海系土器も全国的に拡散していることが知られている。安部球場(東京都新宿区)を早稲田大学で発掘したが、長径110m、短径90m位の堀を巡らせた弥生時代後期の環濠集落が出土した。土器の30%は静岡県天竜川流域の菊川式土器だった。天竜川流域の土器は、神奈川県海老名市近辺でも多く、東京や千葉にも来ている。

古墳出現期に列島内の広範囲に土器が動くのか。沼津の<sup>おおくるわ</sup>大廓式土器が福島県の会津まで波及している。土器の胎土分析を行ったところ、土器は沼津の特徴を持つ大廓式だが、粘土は地元会津のものと判明している。沼津から会津へ移り住んだ人たちが、地元の粘土で沼津の特徴を持った土器を作り出している可能性がある。列島内を人と物がかなり動いている。情報が伝達され、人間が移住し、社会も変わっていく。思想や経済的な面からも、列島内すべてが一つの

元にまとまっていくことを示しているのだろう。

三角縁神獸鏡が椿井大塚山古墳から32枚、崇神天皇陵のすぐ傍にある130mの前方後円墳である黒塚古墳を調査したところ未盗掘で、34枚の鏡が出土した。三角縁神獸鏡は丁重に扱われている訳ではなく、33枚が棺の周りの石室の壁に立てかけてあるだけだった。中国の画文帯神獸鏡は1枚だけ棺の中に遺体と一緒に胸か頭の辺りに置いてあった。

謎は三角縁神獸鏡だけでない。楽浪で作られた可能性がある斜縁神獸鏡なども地域の首長が直接交易で入手したのか、畿内で一括して入手して配布したのかよくわからない。大前方後円墳の出現直前、北陸や東海系の土器が動くといっても、人間によって運ばれた結果である。古いムラを捨て、新しいムラを目指すような集団移住を意味する。列島内の政治経済的な動きは相当激しい。

## 5 いわゆる「中央史観」を乗り越えて

今まで、京都、奈良、大阪といった近畿地域が列島内の「先進地域」で、勢力も強くて、中心であるという考え方が多かった。

三角縁神獸鏡は、同鑄型のものが1枚は京都の椿井大塚山古墳、1枚は群馬県の古墳、もう1枚は九州の前方後円墳、というように各地で出土しており、分有されているという。確かに、中央政権の政治的な支配や動きと関わると思う。さらに、鏡の分有は中央と地方政権との間に同盟関係や政治的な支配関係が生じたことを示すと考える人もいる。

しかし、利根川下流の千葉県香取市小見川の城山1号墳から三角縁神獸鏡が出土した。3世紀から4世紀初頭の古い古墳にあるべき鏡なのに、なぜ6世紀後半の石室から出てくるのか。古い時代にもらって伝世したとか、6世紀後半になって被葬者が三角縁神獸鏡を入手にしたとは考えにくい。

列島内における各集落や地域、それぞれの特徴を持ちながら発展している。畿内だけが先進

地域で、あとは後進地域という史観では理解できない。

所在論よりも邪馬台国の時代の考古学的な事実が重要だ。こうした前方後円墳の中で、3世紀の終わりまで遡らせられるのは桜井の箸墓古墳しかない。最古の前方後円墳だということになると、箸墓古墳が卑弥呼の墓の可能性がある。戦後の研究が進み、ようやくたどり着いたのが邪馬台国畿内説だろう。しかし、多量に出土する三角縁神獸鏡一つとっても、いったい誰がどこで作ってどうしたのかは、はっきりしない。

4世紀初めに高句麗が楽浪や帯方郡を滅ぼした。そこにいた多くの鏡工人が日本にきたのかもしれない。鏡における鉛の同位体元素の含有量で産地がわかるという研究が進んでいるが、弥生時代の青銅製品を溶かして新しく作るかもしれないので、単純に製作地を限定できない。

いずれにしても、長野県、シナノのクニは、列島の中で後進地域というとらえ方ではいけない。青銅製品が相当来ている。これは、日本海岸から来たのではないか。これからの10年、20年の日本考古学は、地域としてはおそらく新潟、富山、石川といういわゆるコシ（越）の地域が研究のポイントになろう。邪馬台国時代の「シナノのクニ」の移り変わりはそう簡単なものではなく、他の地域との関係をいろいろ保ちながら進んでいる。その際に、有力な河川の存在が、重要な問題になろう。弥生と古墳時代の接点の研究というのは、今も苦しみながら進んでいるところだと思う。

## 信州人の一万年 ―骨から歴史をみる―

茂原 信生 (京都大学名誉教授)

### 1 日本人の起源

アフリカを約7万年前に出た集団が、約4万年前にアジアに到達し、約2万年前の氷河期、大陸と日本列島がつながっていた時代に渡ってきたとされる。

沖縄では、いくつか旧石器時代人骨が見つまっているが、本州では静岡県の浜北だけで、長野県ではまだ見つかっていない。

### 2 骨から何がわかるか

骨には筋肉がついている。姿勢などで筋肉の量が変わり、骨に影響が出るので、生活や職業などが骨から推測できる。

縄文時代人は、頑丈な体つきをしている。男性の平均身長が158cm、女性は147cmで、現代人に比べると小さいが、頭が大きく、歴史上、最も顔の彫りが深い人たちだった。

歯も特徴的で、上下がかみ合う毛抜き状の噛み合わせをしている。がっちりしているが、歯の大きさは逆に現代人より小さい。

顎は、噛むための筋肉である咀嚼筋そしゃくきんが発達したため、ロッキングチェアのように下顎の下面が丸みを帯びている。現代人にはみられる下顎のえらの前の凹みが、縄文時代人にはない。縄文時代人は縦に短く横に広い、角張った顔だった。

座り方にも特徴があった。距骨きょこつという踵かかとの一つ上の骨の関節に蹲踞面そんきよめんができています。縄文時代人がしゃがむ姿勢しゃがむ姿勢 (和式のトイレでの座り方) を日常的にしていたことを示す。

将軍徳川家慶いえよし (61歳) の歯は、硬いものを食べない生活をしてきたため、歯がほとんどすり減っていない。ところが、縄文時代人では30代の若い人でも歯ぐきから上に出ている部分(歯冠)がすり減ってしまっている人が多い。現代人とは



図63 講演する茂原先生

食性が違って歯の使い方もちがうのだろう。ほかに成人の儀式あるいは自分の集団を示す属性なのか、歯を抜く風習はっし (抜歯) もあった。

病気や外傷も骨に痕跡がのこるものはわかる。外国から、弥生時代に結核、鎌倉時代にハンセン病、室町時代に梅毒が入っている。信州にもすぐ伝わってきているようだ。縄文時代には骨に戦傷の外傷があまりみられない。弥生時代以降とちがって戦いのようなものは少なかったのだろう。

骨そのものではないが、骨から採取した遺伝子(ミトコンドリアDNA)研究で、従来南方系とされてきた縄文時代人の中に、北方系の人たちも入ってきており、日本人のルーツは単純ではないようだ。

### 3 信州の縄文時代早期人

北相木村の栃原岩陰人とちばら (約9千年前) と高山村の湯倉洞穴人ゆぐら (約8千年前) は、同じ長野県だから同一集団かと思えば、栃原は北方系、湯倉は南方系の異なるミトコンドリアDNAタイプであっ



た。ミトコンドリアDNAは、母親から受け継がれるものなので、母親の出自がわかるだけだが、先述のように分析が進むと分かることが多くなってきて複雑になり、単純に割り切れなくなってくる。

栃原人は下顎骨が細く、華奢だといわれる早期人骨の代表である。ただし、筋肉は発達している。面白いことに縄文時代の一般的な例、岩手県貝鳥貝塚と比較すると足の骨の太さは同じだが、上腕骨の太さが違う。栃原人は上腕をあまり使わない生活だったのだろう。理由は人骨だけではわからないが、その後の信州の縄文時代人は、だんだん上腕骨が発達して他地域と変わらないぐらいになる。

レントゲン写真で栄養条件が悪いとできるハリス線が脛骨などに認められる。恵まれた生活を送っていたわけではない。鉄分欠乏による眼窩の天井に穴があく事例の存在もあり、栄養状態が良くなかったことを裏付ける。

#### 4 信州の縄文時代後期人

縄文時代人骨は、量的には海岸部が主で、内陸部のまとまった出土例は皆無だったが、安曇野市明科の北村遺跡で300体以上の縄文時代後期の人骨が出土した。まわりの土ごと発泡ウレタンで固めて取り上げ、場所を移動し、それから骨を取り出した。188体の人骨を約4年間かけて、少しずつ丁寧に観察した。

歯のエナメル質減形成が非常に多かった。歯の形成時期に食糧危機や大病をすると石灰化が不十分になり、エナメル質の形成がしっかりできずに、歯に溝や斑点が生じる。犬歯だと石灰化が0.5歳からはじまり6.5歳で終了するので、溝がどこにあるかで何歳ぐらいでダメージを受けたのかわかる。北村人も決して楽な生活ではなかったのだ。

乳児の骨は残りが悪いので平均寿命の算出は難しいが、それでも一般的な縄文時代人は25～30歳とされるが、北村では、40～60歳の人骨も多く、長く生きた人もいる。

飯田市中村中平遺跡（晩期）では、全量で

32.8kgの焼けた骨が出土した。人骨一体分の骨の重さは約2.9kgだが、火葬すると約2.1kgと減る。単純に割ると16体分だが、中村中平では、頭蓋骨に比べ四肢骨の出土が極めて少なく、個体数はもっと多かったにちがいない。焼骨の表面にはひびがあった。乾燥した骨は焼いてもひびは入りにくいので、生で焼いた火葬であった。

これ以外にも県内には、坂城町保地遺跡や佐久市におられた田中和彦氏が調査された小諸市七五三掛遺跡などの例がある。

抜歯は、信州大学の西沢寿晃先生が県内8例を集成されている。北村遺跡では歯の脱落例はあるが風習的抜歯はなかったようだ。抜歯には犬歯だけ、あるいは切歯や第一小臼歯まで抜く様式があり、抜歯が盛んな地域との関係などを調べていけば面白いだろう。

#### 5 信州に来た渡来系弥生時代人

弥生時代になると稲作をもたらした渡来系の人たちが列島に来る。渡来系の人、基本的に北方の寒冷気候に適応している。動物学の法則で、寒冷地に住むものは体温を逃がさないために、顔の出っ張りが少なくなり、手足が短い。そうした渡来系の人、男性の平均身長が163cmと高く、歯が大きい。この人々を区別する特徴として上顎中切歯の内側が窪む特徴（シャベル型切歯）がある。

弥生時代人は、骨や歯の形から縄文型や渡来系に分かれるが、明治の元勲でいえば、前者が西郷隆盛（薩摩型）、後者は木戸孝允（長州型）だ。長州型は、朝鮮半島から渡来した人びとが最初に西日本で混血したことによるのだろう。

長野県でも、渡来系の歯を持つ人々が、長野市伊勢宮遺跡（塩崎遺跡群）から出ている。長野市の松原遺跡や佐久市森平遺跡では、ダブルシャベル型（内面だけでなく外面も窪んでいる）の歯も出ている。弥生時代中期には長野だけでなく、佐久にも渡来系の人々が来ていたことを示している。

## 6 古墳時代から中世人の特徴

渡来系と縄文系が混血しながら、古墳時代になると現代人の祖先となる。古墳時代人は、顔が扁平で身長も163cm程と高い。噛み合わせは下顎が段々小さくなり、上顎の歯が前に出る。長野市大室古墳群では一つの古墳から218本の歯が出ている。どこの歯かわかるので、個体、老若男女が何体ぐらいかわかる。

佐久市西近津遺跡群では、平安時代人骨の歯がシャベル型だった。火葬された骨は、長野市松原遺跡の古代人骨では23例のうち1例だったが、中世人骨になると89体のうち58例が焼けていた。火葬が一般化する。この頃の人骨は平坦な顔で、下顎骨は比較的頑丈である。

佐久市砂原遺跡では、5体の江戸時代人が見つかっている。同じ時代の江戸町民と似ていて、顔の縦が短く、横は広く、歯は出っ歯という特徴がある。顎が小さくなって乱杭歯も増える。歯はあまりすり減っていない。エナメル減形成は少なく歯槽膿漏が出てきている。江戸時代人は歴史上最も身長が小さいが、とくに砂原1号人骨(女性)は、

139cmと小さかった。

## 7 信州人はどうなっていくか

徳川一族は顔が長くて、咀嚼器官が非常に弱々しい。下顎骨のえらの部分の角度が大きく、顔が長い。顎は小さく、歯はすぐ小さくならないために乱杭歯になる。超現代的な特徴である。甘いものが好きだったと文献に書かれている14代将軍徳川家茂は、虫歯がひどかった。徳川将軍だけでなく、仙台の伊達家や松代の真田家も初代はがちりした顔付きだが、代が下ると顔が長く華奢になっている。朝ドラ「朝が来た」の主人公の夫も、実際は大名みたいな長い顔をしていた。やはり、上流階級で軟らかいものばかり食べていたのだろう。ところが、明治維新後一種の攪乱が起きて、こういう人たちはいなくなった。

しかし、安定した社会が続くとこういう長い顔が出てきたりするし、環境が変わるとまたガラッと変わったりする。そうしたことが過去の骨からわかる。過去の骨をみることによって、未来を予測することはできそうだ。

## シンポジウム 骨からみた佐久の古代人 要旨

パネリスト 茂原信生、櫻井秀雄(長野県教委)、柳澤亮(長野県埋文センター)

(櫻井) 佐久市西一里塚遺跡の木棺墓から人骨に装着された鉄釧と歯2本が出土した。先生に鑑定の詳細をご教示いただきたい。

(茂原) 歯は、形態から第2大臼歯の可能性が高く、親知らずはまだ生えていないので12歳前後と判断した。この歯だけでは性別は分からなかった。

(櫻井) 鉄釧を装着しているので、女性と考えた。被葬者は若い女性の可能性があるかと報告書には記述した。若い巫女的な人物かもしれない。

(柳澤) 森平遺跡の歯1点だけだが、渡来系の人佐久に来てると言えそうか。

(茂原) ダブルシャベル型は縄文人には極稀である。塩崎遺跡群等も含め千曲川流域全体で、渡来系の特徴をもつ例が増えている。

(柳澤) 西近津遺跡の平安時代木棺墓から人骨が出ている。出自や階層がわかるか。

(茂原) 古代人骨に、近世の大名と町人のような差があるかわからない。ただ、この歯はすり減っておらず、硬いものを食べ、歯を食いしばるような人ではないだろう。

## 玉（ギョク）とヒスイからみた交流

川崎 保（調査第3課長）

### 1 はじめに

長野県をはじめ様ざまな地域で在地では産出しない「ヒスイ」が出土する。交易などの結果、北陸からもたらされたのだろう。

ここでは、地域と交流の問題の基礎資料であるヒスイについて考えてみる。

### 2 玉とヒスイ

ヒスイと関連し、よく混同される用語として「玉」がある。「タマ」とも読むが、ここでは「ギョク」と読む。タマもギョクも同じ漢字で表記し、実際に示すものは似たようなものなのだが、原義は異なる。

タマはいわゆる大和言葉で、「丸い部分、球面がある物体」を示す。石や土製（焼物）もあり、素材は問わない。

一方、ギョクは、漢語に由来する。狭義では、「磨くと光る硬くて緻密な石」という素材を意味する。古代中国の「玉器」には、ネフライト（透緑閃石・透閃石）が多い。玉器は形によって呼称が異なり、環、璧、玦のように漢字を書き分ける。

ただし、ギョクは広義には<sup>はり</sup>玻璃、<sup>さんご</sup>珊瑚、真珠のような「光る素材」も含まれることがあり、注意が必要である。

ヒスイは、美しい青緑色をしたカワセミを意味する「<sup>ひすい</sup>翡翠」に由来する。転じてカワセミのような美しい青緑色のギョクを意味するようになった。

様ざまな研究史的な背景もあり、便宜的に考古学では、わずかに硬度が高い（硬い）ギョクのヒスイ輝石を硬玉、わずかに硬度が低い（軟らかい）ギョクのネフライトを軟玉とした。

### 3 ヒスイの特徴

ここでは、以上のような歴史的な背景があることだけを指摘しておくにとどめ、ヒスイ輝石のみ



図 64 講演会の様子

をヒスイとする現在の通念に従う。しかし、ヒスイ輝石以外のギョクが重要ではないということだけは、強調しておきたい。中国等では、ヒスイ輝石以外のギョクの研究も進められている。

では、ヒスイ輝石とヒスイと混同されやすい鉱物はどう違うのか。一般的に鉱物は結晶であるので、元素の組成（化学式）であらわせる。

比重は、単位格子の体積と化学式量から求められる。実際の鉱物には不純物が混じったり単独の鉱物でなかったりするので、注意が必要だが分類上の目安の一つとなる。

### 4 産地同定

含まれる不純物や微量元素が産地によって異なることを利用して産地を同定することが行われている。ただし、理化学的な所見は絶対ではなく、考古学的所見を踏まえて糸魚川産であると想定されることがあることを指摘しておきたい。

### 5 まとめ

ギョクやヒスイに限らないが、理化学あるいは考古学それぞれの研究法の有効性と限界を把握した上で、古代の社会（交易や流通）の実態を導き出す証拠として活用すべきであろう。



## 土器の胎土分析からみた交流

水沢 教子 (主任調査研究員)

### 1 はじめに

「胎土<sup>ないど</sup>」とは土器を形づくっている広義の粘土を指す。これを科学的に調査して土器の移動や人々の交流に迫るための分析を胎土分析と呼ぶ。ここでは、縄文土器の胎土分析研究の具体的な方法と解釈の可能性について考えてみる。

### 2 胎土分析の方法

縄文土器の胎土には1/16mm～2mm程度の砂粒子が多く含まれている。そのため入っている砂の種類と種類毎の数は土器の大きな特徴といえる。砂には石英、斜長石、黒雲母などの鉱物と安山岩、花崗岩などの岩石がある。土器中の鉱物・岩石は非常に小さく肉眼では判別がつきにくいいため、正確な鑑定は偏光顕微鏡で行う。

また、土器中の砂は後から混和材として人為的に入れられる場合もあるため、顕微鏡で鑑定できない細かな部分(粘土・シルトを指し、以下「粘土」)の化学組成をSEM-EDSなどで調査する必要がある。

### 3 胎土分析の解釈

胎土分析で土器が作られた場所を推測する場合、土器の中に入っている砂(鉱物・岩石)の種類を表層地質図と比較し、それらが地元で産するものかどうか、あるいは粘土が地元の粘土の化学組成と一致するのかどうか調べる。地元と異なる場合、どのような地質学的な背景に由来するかを推測する。同時に今分析している土器が遺跡周辺に広く分布する土器型式なのかどうか、また今分析している土器の作り方が、他の土器と比べて特異でないかどうかを観察する。土器型式、土器の作り方、胎土が地元のものとも一致する場合、その土器はその集落を含む近隣で作られた可能性が高

いが、逆にそれらが全て地元のものとも異なる場合、外部から搬入された可能性がある。胎土が地元であるのに土器型式や作り方が地元のものとも一致しない場合は、土器作りに慣れた人が移動してきて周辺の粘土を使って土器を作った可能性を考える必要が生ずる。そしてこの判断の蓋然性をより高めるためには、地元で採集できる粘土や河川砂、火山灰を探し、在地胎土をより明確にすることや、各遺跡で主体になる土器の胎土に関するデータを蓄積することが必要である。

### 4 交流仮説

縄文中期中葉には集落間の土器の動きが活発であるが、中期後葉になると人や集団が移動し、土器作りの流儀が広がるという仮説を立て、これを胎土分析で検証する試みを続けている。

### 5 まとめ

検証のための手順を一つ一つ踏みながら、縄文時代の土器の移動、人の移動と交流の実態へのアプローチを、末永く続けていきたい。



図 65 講演の様子

## V 研修等の概要

### (1) 講師招聘などによる指導

期 日	所 属	職・氏名	指導内容
5月21・22日	一般財団法人長野県文化振興事業団	理事 市澤英利	センターの業務運営について 遺跡調査について
11月27日	京都大学	名誉教授 茂原信生	塩崎遺跡群の出土骨について

### (2) 全埋協等への参加

期 日	会 議 名	開催地	参 加 者
4月8日 1月8日 3月16日	指導主事・専門主事会議	長野市	近藤尚義
4月24日	公共開発事業に伴う埋蔵文化財保護に係る関係者会議	塩尻市	岡村秀雄
5月12日	公社公団等連絡会議新規採用職員研修会	長野市	片山祐介 腰地孝大 太田光春
6月18・19日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	長野市	会津敏男 多城 哲 平林 彰 山本希一 岡村秀雄 町田勝則 川崎 保 ほか
7月27日	文化財保護行政市町村担当者会議	長野市	川崎 保 谷 和隆 長谷川桂子 福井優希 小林伸子 太田光春
8月26～28日	第1回埋蔵文化財担当職員等講習会	富山市	川崎 保 柳澤 亮
10月15・16日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック連絡会	富山市	山本希一 岡村秀雄
10月29・30日	関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者職員共同研修協議会	新潟市 胎内市	西 香子
11月16日	関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議	横浜市	川崎 保
12月10・11日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	広島市	町田勝則 日向 育 福井優希
2月18日	全国遺跡報告総覧シンポジウム	奈良市	岡村秀雄
2月18・19日	博物館等関係職員研修会	千曲市	平林 彰 町田勝則 水澤教子 近藤尚義 柳澤 亮 高山いず美 福井優希 腰地孝大 太田光春
2月25日	市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会	千曲市	平林 彰 町田勝則 近藤尚義 柳澤 亮 高山いず美 福井優希 腰地孝大 太田光春 高津希望 小林伸子 飯島公子 片山祐介 大久保邦彦 風間真起子

### (3) 研修および資料調査

期 日	参加者	場 所	内 容
12月8～18日	高津希望	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「文化財写真課程」
12月11・12日	上田 真	奈良市	古代官衙・集落研究会
12月15日	河西克造	飯田市	飯田市歴史研究所 神之峯城跡に係る古地図等の調査
2月15～19日	飯島公子	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「保存科学Ⅲ（応急処理）課程」

## (4) 学会・研修会などでの発表

期 日	派遣先	担当者	内 容
4月18日	山辺歴史研究会	綿田弘実	研修講座「海岸寺遺跡の発掘調査」
7月19日	上田市立信濃国分寺資料館	河西克造	市民講座「山城の考古学」
10月4日	塩尻市立平出博物館	河西克造	平出歴史大学「発掘された山城」
10月10日	茅野市尖石縄文考古館	水澤教子	宮坂英弼記念尖石縄文文化賞受賞記念講演
11月15日	佐久市教育委員会	水澤教子	市民公開講座「山と川の縄文人-世界史からみた中央高地の先史文化」
11月22日	中野市立博物館	綿田弘実	「千田遺跡の発掘調査」
12月3日	中野市立博物館	水澤教子	「北信の縄文文化」
2月10日	篠ノ井地区住民自治協議会 塩崎地域委員会	近藤尚義 高山いず美	「平成27年度塩崎遺跡群の発掘成果について」

## (5) 市町村・関係機関などへの協力

期 日	依頼元	担当者	協力・指導内容
4月22日	長野県教育委員会	会津敏男 多城 哲 平林 彰 岡村秀雄 町田勝則 川崎 保	三所会議
5月27日	須坂市教育委員会	岡村秀雄	施設見学
6月16日	長野県教育委員会	平林 彰 川崎 保	長野県文化財活用活性化実行委員会
6月19日	(公財) 鹿児島県文化振興 事業団埋蔵文化財センター	鶴田典昭	施設見学
7月3日	長野市教育委員会	岡村秀雄 町田勝則	長野市塩崎遺跡群発掘調査の現地・施設見学
8月18日	須坂市教育委員会	綿田弘実	須坂市文化財保護審議委員会（第1回）
9月4日	長和町教育委員会	川崎 保	英国セットフォード「エンシェントハウス」ヒストリークラブの長野市塩崎遺跡群の現地見学
9月7～11日 2月1～5日	東北大学	水澤教子	非常勤講師委嘱 集中講義「博物館資料保存論」「博物館展示論」
9月25日	愛知県埋蔵文化財センター	綿田弘実	笹平遺跡の発掘調査指導
9月27日	長野県教育委員会	片山祐介	信州遺産ガイドツアー トレッキングツアー第1回「中山道鳥居峠」
9月28日	長野県教育委員会	平林 彰 岡村秀雄	黒曜石原産地遺跡関連市町村保存活用連絡会議
10月10日	長野県教育委員会	平林 彰	信州遺産ガイドツアー バスツアー第1回「塩の道と信越国境の文化遺産をめぐる」
10月17日	苗場山ジオパーク振興協議会	谷 和隆	柴村ひんご遺跡の現地見学
10月21日	須坂市教育委員会	綿田弘実	須坂市文化財保護審議委員会（第2回）
10月23日	長野県立歴史館	平林 彰	第1回長野県近世城郭・城下町研究会
11月8日	長野県教育委員会	片山祐介	信州遺産ガイドツアー トレッキングツアー第3回「高鳥谷神社と高鳥谷山」
11月12日	長野県立歴史館	市川隆之	長野市塩崎遺跡群における考古資料保存処理講習会実習
11月18日	上田市立丸子公民館古物 再生講座・事務局	綿田弘実	施設見学



期 日	依頼元	担当者	協力・指導内容
11月21日	長野県教育委員会	川崎 保 柳澤 亮	信州遺産ガイドツアー バスツアー第3回「佐久の文化遺産、自然と大災害の痕跡をめぐる」
11月25日	長野県教育委員会	会津敏男 川崎 保	第2回長野県文化財活用活性化実行委員会
12月9日	富山市埋蔵文化財センター	西 香子	長野市浅川扇状地遺跡群出土の鴨徳利の実見
12月9日	小諸市教育委員会	綿田弘実	寺ノ浦石器時代住居跡の発掘調査指導
2月12日	佐久市教育委員会	市川隆之	上の城遺跡Ⅱ出土の陶磁器類の産地及び時代鑑定

#### (6) 学校関係への協力・指導

期 日	学校名	内 容	担当者
4月8・10日	松本市立波田小学校	出前授業	川崎 保 水澤教子 黒岩 隆 福井優希
4月16・20日	長野市立通明小学校	総合的な学習の時間	町田勝則 水澤教子 伊藤友久
5月8日	長野市立通明小学校	発掘体験	川崎 保
6月2・3日	長野市立広徳中学校	職場体験	岡村秀雄 町田勝則 川崎 保 市川隆之 伊藤友久 鶴田典昭
6月9日	北相木村立北相木小学校 南相木村立南相木小学校	発掘体験	川崎 保 市川隆之
6月23日	長野市立吉田小学校	土器洗い体験	町田勝則 西 香子 鈴木時夫 福井優希
6月24日	長野市立通明小学校	体験学習のフォローアップ	川崎 保 近藤尚義
7月7・8日	長野市立篠ノ井西中学校	職場体験	岡村秀雄 町田勝則 川崎 保 市川隆之 伊藤友久 鶴田典昭 廣瀬昭弘
7月14・15日	飯綱町立飯綱中学校	職場体験	岡村秀雄 町田勝則 川崎 保 市川隆之 伊藤友久 鶴田典昭
7月15・16日	栄村立栄小学校	見学及び発掘体験	町田勝則 谷 和隆
7月23・24日	長野市立篠ノ井東中学校	職場体験	岡村秀雄 川崎 保 市川隆之 伊藤友久 鶴田典昭
7月27日～ 8月8日	国立長野工業高等専門学校	インターンシップ	伊藤友久 鶴田典昭 近藤尚義
8月17日	長野県庁インターンシップ	インターンシップ	川崎 保 鶴田典昭
10月19・20日	長野市立犀陵中学校	職場体験	岡村秀雄 川崎 保 市川隆之 伊藤友久 河西克造 水澤教子
10月19・20日	長野市立松代中学校	職場体験	岡村秀雄 川崎 保 市川隆之 伊藤友久 河西克造
10月27・28日	長野市立川中島中学校	職場体験	岡村秀雄 川崎 保 市川隆之 伊藤友久 河西克造 水澤教子
12月16日	長野県若槻養護学校	出前授業	近藤尚義 風間真起子

#### (7) 資料の貸し出し

貸与先	貸与資料	貸与期間	備 考
(株)ジャパン通信情報センター	飯田市龍源寺跡の現地説明会資料及び写真	デジタルデータを提供	『文化財発掘出土情報』12～1月号「各地の動向」に掲載
(株)小学館	長野市篠ノ井遺跡群出土円形浮文で飾られた甕	カラーポジフィルムを貸し出し	『日本美術全集』第1巻「日本美術創世記」に掲載

## VI 組織・事業の概要

### (1) 組織

一般財団法人長野県文化振興事業団

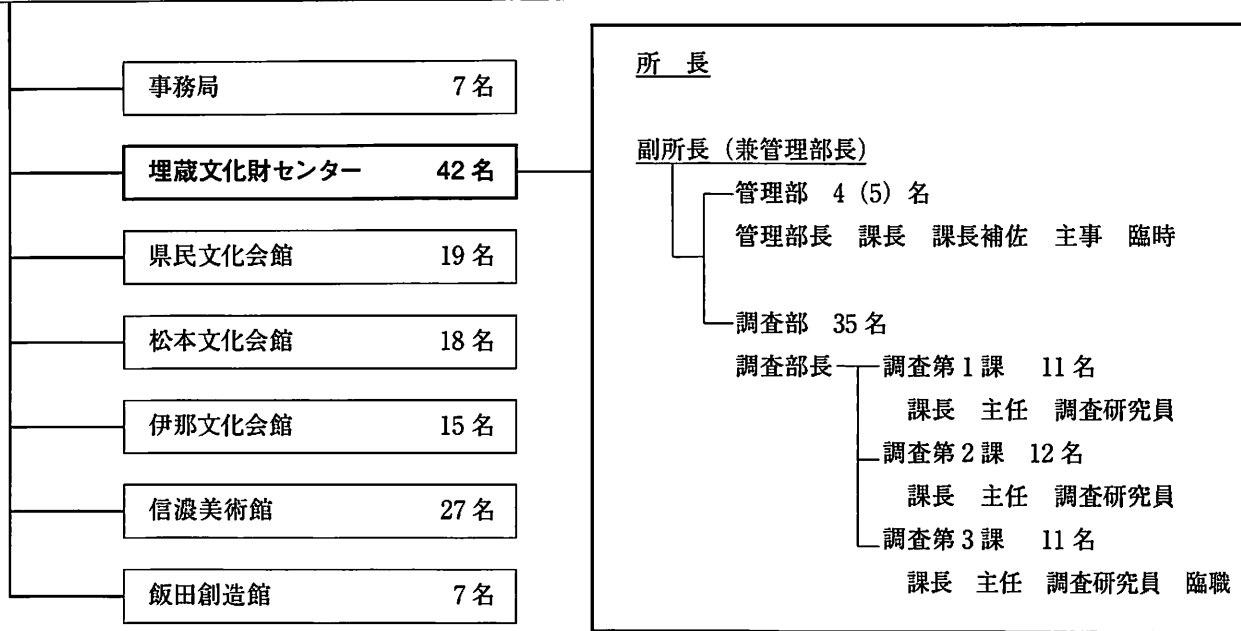
【評議員】 3名 水本一雄 堀内征治 阿部精一

【理事会】 12名

理事長：近藤誠一（元文化庁長官） 副理事長：塩澤庄吉（県芸術文化協会長） 常務理事：松本有司

理事：松井公子 武井勇二 橋本光明 金澤 茂 市澤英利 出川久雄 宮澤敏夫

監事：小川直樹 山崎利男



### (2) 職員（事務系臨時職員を除く）

H27. 3. 10現在

所 長	会津敏男	
副 所 長	多城 哲	
管 理 部	管理部長（兼）	多城 哲
	管理課長	山本希一
	管理課長補佐	望月英夫
	主 事	戸谷良子 日向 育
調 査 部	調査部長	平林 彰
	調査課長	〔第1課〕岡村秀雄 〔第2課〕町田勝則 〔第3課〕川崎 保
	主任調査研究員	〔第1課〕綿田弘実 河西克造 伊藤友久 水澤教子 〔第2課〕鶴田典昭 谷 和隆 〔第3課〕市川隆之
	調査研究員	〔第1課〕上田 真 藤原直人 若林 卓 寺内貴美子 片山祐介 腰地孝大 〔第2課〕黒岩 隆 西 香子 長谷川桂子 小林伸子 鈴木時夫 大澤泰智 高津希望 福井優希 太田光春 〔第3課〕近藤尚義 柳澤 亮 廣瀬昭弘 飯島公子 高山いづ美
	調 査 員	〔第3課〕大久保邦彦 風間真紀子

(3) 事業

事業名		委託事業者	事業個所	事業内容	経費(千円)	
受託事業	調査・整理・報告	中部横断自動車道建設	国土交通省 関東地方整備局	佐久市 尾垂遺跡ほか	発掘作業 整理作業	112,850
		一般国道18号 (坂城更埴バイパス) 改築	国土交通省 関東地方整備局	千曲市 塩崎遺跡群	発掘作業	271,551
		一般国道474号 (飯橋道路)建設	国土交通省 中部地方整備局	飯田市 神之峯城跡ほか	整理作業 報告書刊行	32,270
		(都)高田若槻線 長野市 桐原～吉田	長野建設事務所	長野市 浅川扇状地遺跡群	発掘作業 整理作業	101,280
		(一)箕作飯山線 栄村箕作～野沢温泉村 明石	北信建設事務所	栄村 ひんご遺跡	発掘作業	36,072
		(一)豊田中野線 中野市笠倉～壁田		中野市 ねごや遺跡ほか	発掘作業 整理作業 報告書刊行	34,290
		(一)三水中野線 中野市上今井		中野市 南大原遺跡ほか	整理作業 報告書刊行	6,512
		(都)出川双葉線 松本市出川～双葉	松本建設事務所	松本市 出川南遺跡	発掘作業	13,150
		(砂)海岸寺沢 松本市東桐原		松本市 海岸寺遺跡	整理作業 報告書刊行	14,890
		(国)254号 立科町宇山バイパス	佐久建設事務所	立科町 新城峰遺跡	整理作業 報告書刊行	3,200
		(国)256号 飯田市上久堅拡幅	飯田建設事務所	飯田市 龍源寺跡	発掘作業	33,480
	長野県短期大学敷地	長野県(総務部県立大 学設立準備課)	長野市 浅川扇状地遺跡群	発掘作業	62,700	
研修等	調査研究員研修事業等	県教育委員会	奈良文化財研究所	専門研修		
自主事業	普及啓発等	4月 長野県の遺跡発掘2015講演会 8月 夏休み考古学チャレンジ教室 11月 掘るしんin佐久 8月 掘るしんin埋文 随時 遺跡の現地説明会 広報誌刊行「信州の遺跡」7・8号 「ジュニア考古学」4号 調査遺跡説明板設置(上田市)			1,969	



長野県埋蔵文化財センター年報32 2015

発行日 平成28年3月18日

編集発行 (一財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4

電話:026-293-5926 FAX:026-293-8157

E-mail:info@naganomaibun.or.jp

印刷 三和印刷株式会社